鎮西八郎
爲朝外傳

椿說弓張月

拾遺

下

913.56
Ta624t
t

阿部立郎蔵書

東京帝国大学図書之印

鎮西八郎爲朝外傳 椿說弓張月拾遺卷之三

東都 曲亭主人編次

第五十一回

南風原城に入て妖婦剋勇を感を
佳奇呂麻に赴て謀師王女を迎ふ

鎮西八郎爲朝は辨嶽の麓なる山神廟にて散錢櫃を打開きなんと思はずも一人の美女魔の中よりあらはれ出たり。その形勢いと怪しかりければ走り避んとする袂を引とどめて。縁由を問ねへば女子はいたく怕れたる氣色にて。おのれが程は得も回答ぜ。おのれ問れてやうやくにいふやう。こらはは此山の北邊なる保似村の村正某甲が女兒にて名をは海棠と呼き侍り。いぬる秋采女司にえらみとられて。首里の王城へ參るべかりしに。はからざる都城の騒動浪風おくめる世となりて。えも參らぎおりし幸おさ只いたづらに蟄をる折からこの曉方に。嘯雲國師の大將に全廣といふ猛者が夥の軍兵を領て。こが村に亂れ入り。老たる弱き差別おく。蹙にし侍る程に。こらはが親同肥もあへおく命を隕せしが。こが身は刃の下を潜りて不思議に脫き去にけれど。おほ追擊るいともぞと思へば悲しくおぞ禍しく。おの古廟に走り入り。ふかくのくろひ侍りしおり。おん身

国立国会図書館 25.8.10

210060

も又勝雲法王の筑登之ゴて罪おきものを砍殺し快しとおもへど今は命を惜むゴかひし怒ゴ顯身の世ゴ存命ていくべくの憂を見るめの涙の磯ゴあまとおるとも乾かぬ袖は浮む瀬もおき歎おゴもし又首里の兵おらで南風原ゴ親方の恩顧の人ゴをはそおらべもろともゴこのよしを訴まうして國ゴ爲ゴが身の爲ゴ親同肥の寃を雪がしねひねといひかゴてよゝと泣齊は友ゴ離ゴし浦千島さては亦餘吾の松ゴ羽衣を掛失へる天津少女ゴ彷彿たり爲朝はつく〳〵と綽の來歷伝聞て眉うち顰否ゴゴは曚雲が兵士ゴあらぜ日本國より漂着せし爲朝と呼るゝものおり近曽南風原ゴ身を倚れば汝が寃苦を訴得させんさはあれ力及ぜとも親同肥の枉死を見捨てゆひがひおくも脫れ去りしは孝節兩おがらとる所おけれど教おき女流のうへゴはふかく咎むべきゴあらぜ思ふやうあれは南風原へ將てゆくべし。とくおの櫃に入れかし。と宣へば海棠は世ゴ憑し死おもゝちして落る涙をかゴ拭ひ敎回ふし拜ゴけり。かくて爲朝は海棠を舊のごとく散錢櫃に潛して驚と熊の頭をもその中へ挿入れ楚と蓋してゴを背負ひ南風原を投て歸りなへべ。その日もはやく傾きぬ。この朝大臣利勇は四門を戍る筑登之等ゴ下知し爲朝既ゴ三日の約ゴ乖きてかへり來ぜよしや今日に及びて立かへるとも決して城中へお入れそ汝等もし由斷して門内へ入るゝとあらば軍法をもて罪をべし。といと嚴重ゴ命ぜしかば皆衆うゝなはにて正門後門の番卒を增加え。これを守ると寇を禦ぐゴ異おらぜかくとはあらぜ爲朝は散錢櫃を背負ひつゝ城ゴ入らんとしなへば番卒等遮しく手ゴ〳〵捍棒を打あはして遮とめやをれ爲朝汝既ゴ三日の約ゴ乖きおがら阿容々々と歸り來たは面の皮こそいと厚けれ吾們親方の仰を棄たり今は一足も入るゝと叶はず命おしくは銷ても失よ幸ゴその首を全すべきゴと罵れば爲朝聞もあへぜ大きに怒り小ざがしき燕雀の共囀り汝等が去る所ゴあらず。これおのづから處分あり妨ぜおといきまきて逆茂木のとく左右より。うち合したる捍棒を足えて丁と拂ひ退け進み入らんとしなへば。こは振籍をり。とのゝめきて拿たる棒を閃かし群立て打て覺るを爲朝物ともおなはは夏の雨よりおゑ繁く頭ゴ上へ打かくる捍棒長鎗總尾の槍を絪て。やと引よし。あるひは踏折り搖遣捨人おゑ鄕をゆくごとく。百歩あまりぜ入りぬ。二の城戸を守る筑登之等。あの形勢を見て舌を卷ゑ入れ立てはかおはとて閉扉を礙と鎖したり當下爲朝はをる〳〵と歩みよりて散錢櫃を負ひたるまゝ。二の城戸ゴ手をかけて一聲高く推たまへば關木めり〳〵。と中より折れて城戸は左右へ發と開くそ

東京新史出版社

の膂力鴻門に沛公を救ひたる樊噲にいやましたれば。ほとり近き兵士等に。ひらく扉に
あふり立られ或は頭をうち砕れ或は手を屑ひ腰を折かれ半死半生なるもの数十人辛
ゝて恙なきも群がる羊の頭を低て猛虎に向ふに異ならぬ舌を吐手を刈かゞみな阿容
阿容と通りけりさる程に大臣利勇は事の趣を聞て大きにおどろき。ふかく松壽を恨み
て。喃々と呟きつゝ。按司親雲上等を呼集合みづから器械をとつて正殿に立出武藝ある
里之子二十人に。れの〳〵半弓を取らして左右に侍らし。もし爲朝與ぬかく進み入らば。
亂箭にて射てとゞめとて。その准備大かゝるおらぬ松壽はひとり苦々おく思ひしかば正
殿に走り入て利勇を諫ていへり本るは爲朝は蓋世の勇士なり威をもてこれを制しが
たし國の大幸は人を得たるままにとあゝ願くは親方はやく劒を解弓箭を去らし辭
を安寧にし禮儀をもて彼人を款待しぬへ。もしかからぬは禍却て禍の端とおらん。
といはせもあへず利勇忽地眼を睜り汝いまだ醒ぬやかゝる癡者を吹擧して再び禍と
惹出しおがら者奴を搦捕んといはせぬ。おほ吻を動こそ奇怪なれ。もし露ばかりもその非
をあらば爲朝が首級をとつて。これに見せね。といきほひ高く。心づよくは責れども。いま
だ戰栗は止ざりけるかゝり程に爲朝は前後左右より槍襖をつくりかけたる筑登之

二三十人に送られおがら悠々として来りぬへ。あきよ〳〵とばかりに今まで勇る按司
親雲上里之子に至るまで互に面をあはしつゝ惘然として。する所をあらず利勇は氣色
を見せずとて豚に似たる脣をふり立東方の浮浪人既に約に乖きながらおほ恥をあ
らぬ身のおき所をもまゝに物に狂ふはいかにぞや汝樊噲が勇ありとも。われ亦項王
の威をからんぞ縱鐵壁城は破るとも一言の約は破りがたけん推參おりと罵れば爲朝
呵々と冷笑ひ怪有おることを聞くものかな大臣今幼主を補佐し信義をもて擾亂を鎮
んとぞべきものが言伐兩端によりて義士を容れぬおれ民に譎りを教るはあらぬや夫
辯論はその行程近きにあらぬ加以山川の險阻あり翅おくては翔りがたし爲朝昨
夜件の山を出るといへども路遥おれば今に反べり更に三日に約を違たるはあらぬ且
三箇條は悉くなし果たるに。いたづらに日を數へて賞おきは人の功奴奪ふおりおき見
ぬへ。といひかゝて屑たる櫃をおろしぬへば利勇はいまだ實事とせぬ頭を左右へ打搖
て。いへばといていはるゝものかな思ふに汝雲に心をよして怪しき櫃を屑采きるに疑
ひおしも社どもその柩をうち壞て撿見よと下知すれば筑登之等阿と四若て拿たる槍
を突揺へ一度に刺んと競ひかゝるをものしやと爲朝は眼を瞪らし見かへりぬよ。

その勢ひに辟易し衆皆尻居に撲地と坐を刹勇が左右に立たりける。按司應嶺親雲上呂鍾とて武藝力量の聞ある上官人袖かきあげて走りかゝり蓋を開かんとおたりしが。忽地に眼眩みてもろともに倒れたり里之子等ねこまを見て二人の上官爲朝に投伏られたりとや思ひけん刹勇にあやまちあらせじとて拿たる弓を擲かため蠢の飛ぶがごとく射かくまども爲朝の身にたゝて。散錢櫃に犇々とたつ箭に櫃を射たをせば内に一齊叫苦と叫びて獨りの美人輾び出たり只あれ雲を出る春の月の梢の花にかゝるがごとくまた彼宮城野の櫃の旁宜更に都に匂ふに似たり刹勇ね思ひかけざまぺあれいいかにとぺかりに直と呆れて目を細くしと見かう見れぺ按司親雲上筑登之里之子等ね思ねずも器械を戛離と捨猛に鬚を掻拊てゆがめる官帽を押正し勝を立願を反らし縱に見横に打かがめて意彼首にあらざるものなし此ときまでも岡松將ね默然として居たりけるが忽地席を拍て爲朝にをゝみ向ひ南御曹司時今搖亂の際に遇て士民おのおの鼎預狐疑をこの故に大臣かろ〳〵しく人を容ねずかあらぞ怪しみぬよべからぞさても何の故ありてこの女子を伴ひぬひたる緣故聞まゐしくいと詰問ぺ爲朝莞尒とうち咲てこの件の事につきてね種々の來歷あり其初のふ辨嶽に大島を射て窮巢

山の麓に追ひゆき終にこれを刺留る折から兄弟とおぼしくて二人ぞ少年如此々々の衣を着たるが敵に追れて走り來つ遂とも脫がたしとぺ思ひけん彼等遂に引かへし追敵の兵士と血戰して矢庭にあれを擊とつたり其樹蔭よりその爲体を見るよ彼少年等相識して速に首里へ赴き辭のよしを嘸雲に報知んといふこね問ずとも少年等ね國賊嘸雲が手のものおりと猜したれぺ某一蜀して樹間より走り出忽地件の少年等を擊とつてその首をうちおとをに軀ね立地に鎖鏈て二ッの首級ね目前熊の頭と奬ぺたり怪しき事限りおければ驚て驚の頭を掻切おとして是彼ひとつに右手に引提辨嶽のかたへとて立歸るに保似村とやらんの樵夫山兒等嘸雲が賊兵に亂妨せられおの〳〵痛痍負ざるねおく路傍に仆れたり爲朝おゝにはからずして。そ社消息をあるといへども。はや時後れたれぺ賊兵を擊とむるによしおく只懷中おる藥を與へて。おぺ一手負伐勳りゆき行て林原おる山神廟のかとりにして。この女子に遭ぬよりて。その故を問ぺ彼ね海棠と呼れて保似村おる村正の女兒おり嚮に親同肥を賊兵等に擊れ。いひがひおくも只ひとり平にて脫れ去り。こ社廟内に隱れたりといふ且この海棠ね王宮へ召るべかり一采女おれども嘸雲が弑逆の驕援によつて。その頃衣裙おんどね賜りながら。江も參

らず。もし南風原へ帰る人あらば扶引てこが爲に寃苦を訴たまひねといへり爲朝木石にあらざれば。その哀憐抜見捨がたくて。これさへに將て締りしを頭りに日を數へて城中へ入られず欲もる所今一トたび大臣に拝參して綽の爲体を告さうきんと思ふのみ。絶て野心あるにあらず無禮に許しなへかしと實事虚言うちまぜて審に述乞り輙び櫃を引よして三の頭をとり出し松壽がかたへ指向なへば。利勇に松壽が回報を待ぞ。遽く衙子を離れて爲朝に對ひこれ眼に人おみに勝れて大きやかなれど才淺く智足らざれば實の豪傑を認らず。幸に咎なよ御邊が擊とつゝる少年に毛國鼎が子ども鶴亀と命れひこれを仇とし寃ふものゝ既に前夜箇様々々の事ありしおかれどもこが精忠を君真物の憐みなひてはかちぞもその夜さり彼鶴を生拘り松壽がをゝめによつて。如此々々はからねせしにその計策合期せず曚雲が伏兵全廣等に刼きまて。こが眼心の兵士趙豹李虎を失ひしが今更思へば彼鶴亀に亦曚雲が幻術にて假にそのえのと見せたるのみ實に彼等赤瀬の碑のほとりにて生拘られしとき首を刎られたるに疑ひなしこゝにはとめて御邊の武勇に内て曚雲が詭計をあるこが歎びおれ一ツ加梅美女海棠を伴ひその寃苦を告たりしに義あり信ありその功賞せばあるべからぞ。

抑わが身名家として世々高官を辱しが衣食滿足りて物乏しとも思ざりしがいまだゝる美人を見ぞ虞舜に蛾皇女英を辭せぞ曹孟德の英雄あるも二橋を銅雀に携ざるを恨とせり。これ今こは美女を容るゝとも勇に爲朝あり智に松壽あるを曚雲が幻術も怕るゝに足らぞ疑に御曹司に人中の龍海棠に亦女中の花おり。その龍も用ふべし。おの花も愛をべし。倩惟るに山南省おる大里に南智念玉城に隣北に首里に遠からず。防禦第一の間切なり今これ歓びのあまり御曹司を大里の按司とすべし。與那原與古田。湧稲國より島嶽高宮城に至るまで。十八ケ處の屬村を管領し。二百騎が將として大里の城を守り大功を立なふべしといふ滿悦面にあらはれて手の裏反を勸賞に爲朝頭をうち掉て其させる績おし今その女子の故をもて按司とおらんに本采の情願にあらず。と推辭なへに松壽遽しく小聚ををゝめ御曹司おどてかくに論退おなに賢者に氏を利して國れのづから富といへり大臣辛その人を得て重く用ひなに人事抑國の福おて推辭なふとかに。と説諭せば爲朝亦宣ふやう。こからばこれに所望あり大臣もしかおへ得さしなにに大里を守るべし。おかれども輙くに聽なにに。と宣ふを利勇に聞もあへぞうち點頭何にまもいひなへ聽すべし聽をべし。と回巻しかに爲朝はじめて領

210060

諾して按司の斑に入て席を正くし其がねがねしに死に寧王女の事おゐて大臣國の爲に忠義を盡さんとおらば寧王女を迎て大里の城に冊き入まゐへ。さらば爲朝副將軍とおりて軍配せん。おかるときに國民みな大臣の誠忠を稱賛して。曦雲巽を失ふべしと他事おくも宣へば利勇且く沈吟して。いいるゝ所理あれども王女に裏に王命によつて。陶松壽に擊まゐひぬるに。おほ存命ゐにんや。それに全く廣物おらん今更往方を索ん事。わが力及がたしと諾おねねば爲朝かさねて。いおその事に心易かま其いぬる日はからぎも小琉球の嶋北にて寧王女の必死を救ひ。やがて佳奇呂麻に將て歸りふかく潛し進らしたり大臣おれを迎とらんとおらば智勇の聞えある大將に二三百騎の選兵を授て。彼島へ赴しゐへ。其亦伏兵とおりて曦雲が賊兵を遮り留むべし。水陸既に計略を合をるときに曦雲千里眼をもてはやくおの支をあるといふとも術おかるべし。かくのみいにゝなほ疑しく思にれん歟。わが妻白縫に志氣あるものにしてその智勇をさ〳〵丈夫に劣らぎ惜かおいぬる八月風濤の難に係り瀾を披いて水屑とおりぬ。おかるになほ怪しきに白縫が魂いつの程にか寧王女に憑りてその心操を果さんとをれば王に動靜云爲彷彿として。己が妻に異おらぎ。こゝに一世の因緣を尋まば爲朝少かりし時故あつて。放せし鶴をこの國に棄かね舊紀山の麓にて王女簾夫人に名告あひ玉と鶴とを交易たる支ありきれば其のときに己が與し蛇が珠に仇とおりて王女にふたゝび流離の身とおりゐゝと聞けば亦憂を己が身のうへに比べて昔を忍ぶおもひありいとも怪しき亡妻の恩愛によつて如此いふにいにゝ首尾に箇樣々々とおちもおく說しらしもに己が言を用ひゐにゝ公私の幸と思に過ぎと。と憚る氣色もおく宣へば松壽に小勝を殺と拍大里按司（爲朝をいふ）の宣ふ所忠信恩義を失に寧王女を毛國鼎が僕子へといにゝせしに曦雲が所爲おらん王女存命の事に怪むに堪たれども爲朝の亡妻その魂を憑るといへば王女にしてに王女にあらぎ。かゝる烈女の志を奪ふと知に後日の殃脫れがたけん。むやく疑を決して使を遣し烈女の魂を迎ゐへ。しからば夫婦恩義を感じて國のため。大臣の爲に等閑にすべうもあらぎ躊躇ゐふことかいとゝめ說ども利勇に左に右回若にせて失肚の裏にて尋思しつ。己れ今おの海棠に容れて寵愛せば衆人必ず色を好むといにん讒の門を塞んにに。この便宜に王女と名告る女子をもて爲朝に妻にし。彼にも美女を抱するにしかぎよしや王女世に在りても按司の妻たり。曦雲滅び王子早世すといふとも王女に王位に即がたし。そのときわれ三省諸島を掌握して中山王とおらんに。

誰かこれを奪へりといふべき。おかおり〳〵と計較既に定りて莞爾と咲げに物の情に奪ひがたし。大里按司の亡妻白縫とやらん王女に假着もるときは王女は即その人の妻おり速にあれを迎とりて二世の心操を盡さもべければ松壽は二百餘騎を將て五艘の軍船を浮べ爲朝に先だちて佳奇呂麻に赴くべし。といそがせば爲朝はおもひの外おる氣色にて剛勇にむかひ白縫が魂たましひ王女に憑ることありとも甚ふたゝび娶るの意おし。東方一葉の浮浪人として。ゆくりおく國王の壻とおらば王女を辱るのことおらで。群小に妬るべし。との事のみは承引がたし。と宣ふを剛勇は絶て耳にもかけず事既に定りぬ。松壽は夜の中に進發せよ。これは阿公をもて緑由を王子に聞へあぐべけきば爲朝は衣冠を整へ拜賀あるべし。と信だちて。やをら海宗が手を把て應鶴呂緑里之子等を隨し青宮へとて入りにければ燭点をころとおりは。

第五十二回

高樓に曙雲海氣を認る
大里に爲朝王女を娶る

東風平の按司陶松壽は。その夜微頃に軍兵の部して小緑の湊口に纜し次の日の順風に佳奇呂麻を投て漕しけり。松壽は原來才智凡ならざるものなれば。この時つく〳〵と思ふやう剛勇は錦の裀に臥を狗のごとく能もおくて魚肉に飽ぬ人とおらざれば聖賢を見てもおれを吠るの類。されば爲朝を日本國の英雄なりとおらずしてはしめは是を用ひず今又僅に美人を擄來れるを賞美して忽地に按司とすかくて賢を招き士を用るといふべきや遮莫爲朝大里の按司とおりたまふ事は定に國の幸にして王女のふたゝび世に出ぬよは天孫女の餘德おり賀もべし〳〵。とひとりこゝろに深く欲びけり。これより先爲朝は直に衣冠を整て正殿の階下に蹲踞し王子を拜し來るに王子は誕生の社ちいまざ蔡月にだも過されば。さおがら木偶人に異おらぬ阿公是を抱きて。高坐にあり即爲朝を殿上に召昇し大里の按司たるべきよし亦王女を娶しねふ旨を聞へ去らし偏に忠勤を抽て曙雲を滅ぼべし。と仰下さきしかば爲朝恩を謝して退出ぬよに諸按司親雲上等駭然として怪有おるを目送りさてお怪有おる僥倖かおと呟さてこれを談ふおれを妬むも又多かりかゝりし程に爲朝は諸朝筑登之佐二人を鄕導とし雜兵壮人をねりて大里の城に赴き城中の士卒に對面して。やがて十八ケ村の村正等を呼集合稅歛を薄く〳〵法令を正〳〵来れるを賞し叛くを罰しねへば上に枉まる俗吏おく下に僻る頑民おく衆皆赤子の母を得たるこゝちして。のゝる良將の下風に立ん

率ゐ世に有がた紀洪福おりとて。いと憑しき思ひをおせり。うくて第三日に及びて爲朝ゐ城中の軍兵を集合郷に陶松壽が佳奇呂麻へ赴きしより僂れば早歸り來ん日も遠からず。これ今夜子の刻に百五十騎を將て城を出真和志の山蔭に色して松壽が歸るをまつべ紀へ。されば昨夜間者を遣して彼處に地利を撈問に真和志宇平の間に大河あれども上ゐ二股にわかれて陸に續く。その流れ海に入り東のかた長川のかとりに高峯あり。これ兵を伏するに究竟の要害おり功ゐ敵をたるにありもし驚して敵を見て逃くものゐ罷次して免しがたし。此旨よく〳〵おゝろ得いへと觀示して手部遣に定りしかば。その夜子の北及に主從百五十騎密やかに城を出て真和志の東北なる饒波長川の間樹だちふかき山蔭に色して松壽が王女に俱して歸り來るを待ほどに爲朝忽地思ひゐよやう鶴亀ゐ佳奇呂麻に赴きて今ゐ彼處にあらんぞらん。もし松壽おまられて利勇に告らるおとあらば。そのたびゐ救ひがたし。とせんかくせんと思ひたゆたひゐひしが又つくづくと思ひかへせば松壽ゐ乳實に利勇を輔るものにあらぬ彼が信やかにもておすハ王子に忠義を竭さん爲歟。さらずゐ列に故あるべし。前の夜鶴が井に落て忽地擒とおりしと紀松壽ひとり利害を說てこれを助たりと聞べ彼にまらるゝとも陷むに足らず人の子をおもふにもこが子舜天丸ゐいかにありけん紀平治高間夫婦のものも世になき人の數にや入り名ん妻子郎黨離散して。これのみゑゝに漂着し今一城の主とおれば。よしや功成名ゐ遂るとも富貴を離ととも受べき弓箭とる身ゐ弓箭は爲に生涯を役せられ。小人利勇が麾下に屬して。かゝる世を經る愚さよと過來しかたをおもひやり。猛きこゝろもまかすがに薄命を歎きゐふおるべし紫下其生再說陶松壽譬ゐ順風に真帆掛て大洋數十里を走らし次の日佳奇呂麻に着舩して。磯方にうちあがりて見るに嶋にゐ人影もあらざりけり。とかくして巨木の虛に老たる男女躲れ居たるを見出して。その故を問べ件の老夫婦。おそる〳〵這出て今朝しも大將の軍舩おの島を投て潛よしゐよを島人等はやくも見て。ふかく怪みこゐ疑ふべうもあらぬ。曇雲法王の軍兵おるべしとて。衆皆慌忙紀つゝ山ふかく逃入りてひしが吾儕ゐいたく老たれば。おもふまゝに山に登とゑえかおゐねべこゝにかくゐひゐといふ松壽ゐこゝを開てうち笑ひ汝等さゐ怕ものおせそ。われゐ爲朝の新に依つて王子の仰をうけゐ鬼王女を南風原へかへし入れ奉らん爲に來れる按司陶松壽なり汝等はやく島長にこのよしを告よかしとていと叮寧に說諭せば。老夫婦ふかく歡びて。おの〳〵杖に携りつゝ山路を投て走り去

東京稗史出版社

一向あまりを經て島長林太夫を將て歸りつ當下島長等に沙汰頭を突埋めて數回松壽を拜すれば松壽に長をちかく招きて爲朝を大里の按司に任ぜられたる事且彼人のまうすよりて王女にこの島に在をよしをまろし召すおいち松壽をもて迎とらしぬよ。王子の仰を述大臣利勇の處分によつて來れりと說ちらすれば恭太夫等ふかく歎びかるべしとに思ひかけず遙にその船を見て島の老弱驚き騷ぎすに曙雲が討手の兵おそ出來にけりもし脫るゝ事もやとて衆皆山ふかく躲るゝに王女ひとり騷ぎぬにを。おてふさるとやにある思ふに彼軍船に南風原よりこれを迎の使おるべしと宣ひしが。おほ心もとおけまば。とりあく王女を背負ひ進らせて岩陰の中へ潛し奉りしにこの老夫婦が如此々々のよしを告げに活たるこゝちしてはじめて王女の賢智を感じまづ王女をば長が家へ歸し入れ奉りぬ見參あるべしといひ果てみお先にたちて誘引にぞ松壽に軍兵を纖方に幾しとめ僅に十人の筑登之を將て島長が家に赴就王女に拜謁して爲朝の事を告王子の仰を述にければ王女に松壽を勞ひて或に歎び或にうち泣て形おき世のたゞすまひを憤り崩御ぬよ尚寧王薦夫人の事將毛國鼎查國吉等が忠死の事おどを問もし說もちらしたまふとそれに面影こそ憔悴ぬへ昔に露のにりぬにず亦爲朝の按司にありぬよを歎び將舜天丸が事をつかしとてうち歎ぬよときに物のいひざまおども日本人めきて見に王女に似ぬにを松壽にこの形勢を見て爲朝は如此物がたりに偽あらざりけりと嘆嘆して信やかにいひ慰めまゐらをる程に長に島の老弱とともに鮮魚海藻をもて松壽等を待ち。みお歎びを述て勇る氣色おきものおし當下王女に松壽に對ひて。これに爲朝の故妻にして昔の女王にあらをこゝをもて島人等白縫王女と稱し或に白縫姫と呼べり。抑こが身迹をこの島に癒しころより冊封つかふる少女二人あり。一人が名にあかいたゞきと呼又一人にこくまといふ彼等に父もおく。母もおし。いと惜きものどもおれば南風原へ將てゆかんとおもふおりこの事いかにあるべきと問ぬへば松壽且く尋思をるに。あかいたゞきに丹頂にして。これ鶴こくまに三曲にして龜おり。きてに鶴龜兄弟もこの島にありけりと猜して莞爾とうち笑み島の少女を南風原へ將てゆきたまはん事。あしかるべしとに思ひにねど大臣利勇に狐疑多し。いまだその事を告ぎして俱しぬにを彼ものゝ爲に殃に端とおるべし某島長にこおろ得さし別に小船をもて大里の城に送り遣をべしと回答しかば王女も又松壽が胸中を猜して。ふさゝぴこをいひ出ぬにず。よりて鶴龜に島長が家にありといへども松

壽に對面せざりける。さて次の日追風よしとて松壽は王女を船に扶乘しまゐらし。その餘の軍船前後に守護して纜を遥に漕出せば島人等名殘を惜み慕び奉る事爲朝と別れしときに異からぬ王女世の中ひゐくおりゐへば御曹司とともに曚雲を討滅し白日青天を見せゐへかしと呼ぶこえを浦風さへに吹おくりていと哀れにいやましたり。おの時曚雲は望洋樓に登て遥に海上を打おがめ驚つゝ左右を見かへりていへりけるは。利勇はからぬも漂着の壯士を得てそれがをゝめに隨ひ王女を佳奇呂麻より呼のゆして。件の猛將に妻せんとを王女の船は今夜小祿の港口に着べしといぬ折ふしその席に侍りたりける三司官棟遜耳目官全廣綠由を聞てうち驚きまからば吾們軍兵を將て彼處に赴き王女を奪ひとるべしといへば曚雲肯をうち掉つゝ亦且く打眺て呵々と冷笑ひ放壯士は智謀あり王女を守護するものは松壽おるべしまかるときは船にはし不虞の備あり陸には數百の伏兵あらんよしや王女を奪ひとるとも己が士卒を損ずべし且王女は舊の王女にして舊の王女にあらず。これを奪ひとるといふともその益おきに似たりさるによつて己れ王女が佳奇呂麻にあるを猜したれど討手の沙汰におよばぬ。かゝるべ紀事を豫てしれば別に奇計を設たり。はづ利勇は自滅さして後に件の壯士を擊とるべしまかはれど利勇等が命數いまだ盡ぬ今より六七年の月日をおくらば。わが謀成就せん驟ぐべからぬ驟ぐべからずとて許さねば揀遜全廣感服して法王の神機妙算今はゝとめぬと稱賛をさる程に王女は恙おく小祿の港口に着船しやがて南風原の城に入りゐへば爲朝も又兵を纏めて大里へ歸りゐひにけりされば利勇は恭しく王女を城中へ迎入るゝに王女は利勇を見て遽しく答禮しわらはゝ爲朝が妻に白縫と呼るゝものに侍り大臣の尊信禮に過たりと回答ゐふ物のいひざま琉球言語にあらざれば利勇は呆れてまづ赤蕉舍に誘引し女房五七人を冊して竊にその爲体を窺ふによろづ僞にあらぬげに王女は最に松壽に擊れたりけるこれは王女の亡魂が他婦に憑たるおらんされば面影こそ王女に似たるそのの人にはあらざりけりまかれとも己是今こは女を王女にして爲朝に妻せおべ世の人己れを義士とし稱んまかふり〳〵と意の中に計較て遂に松壽を疑ず艇て黄道吉日を卜食して松壽をもて王女を大里の城へ送らし婚姻の事をとり行はるに爲朝はおゐ再三再四推辭ゐへどもその事脫がたければ已おとを得ぬ赤誕の祭る所に任しゐに程に夫婦の契淺からで分てる鏡を合もる如し。かくて有一日佳奇呂麻の島長が鶴亀を小船に乘して潛に大里へ參りしかば。

爲朝これを呼び入れて兄と弟が忠孝を賞嘆し島長まに物語とらして佳奇呂麻へ歸ら
ー松壽が志ゆかしされまを暁り鶴亀をふかく潛して城外へ出ーぬにねばおるもの絶
ておかりけり。

第五十三回

人を的まーて利勇強弓に誇る
馬を飛ばして松壽危難を告ぐ

今茲も既まに暮てあら玉のとし立かへり世にやうやくまに暖ゐれども人のこゝろに長閑
あらぬ爲朝に曚雲を討滅さん爲まに。もはら人馬を調煉し民まに教るまに仁義をとー賞罰
法令まに當らざるとおかりーかば士卒おの〳〵その職を守り軍民おの〳〵その業をた
のしみ徳まに化せぬといふ事おく白縫王女亦頗婦徳あり自ら蚕養ーて。機織を勧めぬひ
しかば大里十八處社屬村と〳〵く治りぬ。これまに引かえて南風原の城まに大臣利勇
驕ほーいまゝおるまに美女海棠を得て。おれを鍾愛ー酒宴遊興まに長き日もおほ飽ずとて。
これまに續ぐに燭をもてし絃歌の聲絶る隙おなれば松壽に傍痛くおぼえて。あば〳〵こ
れを諫れども露ばかりも用ひぬ曚雲久しく境を犯さぬはに。が武威を怕るゝえのこ。
萬世の功名も生前一杯の酒まにゐたかぬもーこの時まに樂まに老て命終るの日悔ともい

かで及ぶべき。われ劾主を補佐ーて攝政まに私おく民の爲に疲勞たりかばかりの保養に
見ゆるをべし。と回答ーて諍憚る氣色もおく遊興の爲まに民を虐て租税を重くし非法の
み多かりーかば軍民まを〳〵怨を含みて密まに大里へ。志をよせんと思ふもあれど流
石まに利勇が威勢まに憚りて氣色には見せずされど利勇に民の歎斬をかへりみずして。こ
れまに諂ふを賞ー諫るを罰ー只應鶴呂祿が徒同氣相求る佞人等を重く用ひて。歡樂を共
にーその傲慢季氏が八佾まも過てさおがら國王の遊びまに異おらぬ。とかくして兩三年
の春秋を過ぬほどまに爲朝頻まに上啓して。人馬肥兵狡餘あり節刀を賜りて曚雲を討べ
しと請ねへども。利勇おれを可とせず夫兵に凶器おり民社希ふ所まにあらず。もし怒まに首
里を攻て。その軍利あらずに毛を吹疵を求るおり只固く守りて兵を強くし居おがら武
威を張るまにかゝとて聽さねば爲朝に只齒を切り徒まに月日を過したまひけり松壽
に是彼の形勢を見て。禍わが身まに及ん事をおそれて東風平へ歸らんとのこ思ひーか
ば縞まに腹心の邸黨まに謀計を投城中まに流言をかくて離いふともおく東風平の軍民等按
司の久ーく南風原にあるを見て野心を起し城を燒て曚雲まに降參せんとはかるよー囂
囂として風聲ぬたりしかば。利勇におれを傳へ聞て大きまに驚き驚て松壽を呼ていふや

う御邊久しくこの處にあるをもて東風平の軍民等歟に内應をと聞りはやく彼處に立かへりて謀反社徒を捕捕り固く城を守りてかろ〳〵しく出仕をべからぬと命ずるに。松壽にはかり事あれば依然として領掌し郎黨等を領て即日東風平の城へ立かへり。そ社徴に絶て南風原へ出仕せず利勇ハ松壽が傍にあきをおか〳〵に後ぞすき心持して只彼海棠と翠帳の下に遊び戯れ酒に暴らし色にあかして月日の代謝るをおぼえず。おゝ五六年を過しにゝれハ爲朝頻に焦燥て亦大里より上啓して首里を攻んとを望諸ゐへは利勇にその来啓代見て冷笑ひさらばまづ。これみづから人馬を調練て弓勢のほどをあらせんとて貢米未進の農民等を捕捕らしいたく弓場殿に縛て去れを的と し矢庭に射殺して樂みとせその暴惡禁制に異あらねば心あるも心おきもみな爪彈して大臣に禍獸よりもおそろしと嗤くを海棠にはやくありてぞ社續るものを告るによりて利勇に亦讒るものを捕捕らし新刀を試をと縛して手づからこれを斬るされハ罪おくて命を隕すもの多かり。かくて利勇に有一日海棠とともに城の樓に登りて遥に人の往来を見るに海棠に思ひかねたる氣色にて潸然と泣にけれは利勇驚きてその故を問に海棠にいよいようち泣て大臣妾が物思ひをあらんとあらばまづ左右の人を遠ざけぬへゝしといふに點頭て女房里之子等を退かしに二たび三たびこれを聞ば海棠にやうやくに涙をおさめ大臣によろづに賢くをにせども眉に火の着患あるをありなにを爲朝久しく大里の城を守りて民のこゝろを得さりされハ曚雲を討と縛して時々人馬を調練し東風平なる松壽と計を牒あはして大臣をうしおひまゐらせんとをあれ齊せこの城下を往来をるものも大里のかたへゆくに多くこおたへ来るに稀なり加之王女の爲朝に適りなひてより人みなおれを駙馬と縛をそ社威權をき〳〵大臣に劣らぬを等閑に見なふにいかにぞやかくてに終に彼等が爲に臨にせられなんべしと思へハ悲しく朽をしく禁めかねたる袖の雨はれぬ思ひをありなへと言葉巧に唆にぞ利勇につくく〳〵と聞果て大息ついき疑に思ひあたるとあり只遠に應鶴呂禄を大將とをて夥軍兵を指向大里東風平社兩城を攻落しく爲朝大壽が首級を見んきにとてやがて立んとをるを海棠にその袂を引とゞめ爲朝が勇松壽が智にみな近人のある所應鶴呂禄にその敵手にあらぬ。しー大里を攻るときに東風平より来り救ひ東風平弱くに大里より来り援ん内亂既に起りて曚雲その虚に乘らバ遂に兩おがら防に術おかるべー只詭て爲朝松壽を呼びよし力士に仰て捕捕らしなにゝ刃に衅をして兩虎を獲なんべし。

さに侍らずや。と密語へば剎勇は掌を拍て。大笑して歌ひ寇しおん身は才色兼全の少女おり。この計略究てよし王子は今茲六才におりなへば着袴あるべしと令ぜらさんあの拝賀よに浅るゝとおく爲朝松壽もこが弱こに入るべし。ぢかおり〳〵。とやうやくに心おちゐて。やがて應鶴呂禄等を呼集合件の密計を說ぢらして今月某の日王子着袴の拝賀として。諸按司參内あるべしとぞ令たりける。さる程に爲朝はあの年来あすともおく月日をおくりなふから終に功名の立がた紀を憤りなふに白縫王女は舜天丸の往方いかにと思ひやり。もしこの世にあらばこの春は年は十二になるべきに。この世あの世ともくとなき。こが身二の鬼神靈あるもぢは八重山の霞の外もぬるとゆへど。おほ知りがたきこが子の存亡子故の闇ぢ闇路には迷ひの雲の霽ぬ歟。どあき口說なふ折から忽地南風原よりのおん使と稱して國書院の官人拝賀の吏を告来だれば爲朝は衣冠を整出迎てこれをうけなはるに件の官人は從者をいたがしつゝ亦東風平へとて走去ぬ。その夜更闌て頻に大里の城門を敲くものあり。門を守る兵等かろ〳〵これを入れぞまづ按司にまうしてこそとて。ぢかへしかば爲朝は吏ぢ趣をたゝてぞづから物見の窓より見なふに陶松壽が只一騎潛びて東風平より来れるおり怪みながら城中へ迎入れ手づから燭を乗て閑室に誘引その故を問ふへば松壽はほとり近く膝をもゝめ某小夜深てまゐる事火急の一大事を告まうさん爲おりといひも果ぬに。おは聲高〳〵と爲朝は扇を揚て推禁め後方を倍と見かへりなへば一室隔て漏刻の丑三告る音すおり畢竟松壽がこゝに来つるはいかゐる故ぞ次の巻を讀得てまらん。

東京稗史出版社

椿說弓張月拾遺卷之三畢

鎮西八郎爲朝外傳 椿說弓張月拾遺卷之四

第五十四回

海棠を砍て爲朝曙雲を見る
利勇伐擊て鶴亀門公を逐ふ

大里の按司八郎爲朝は。その夜さり更闌て。陶松壽が慌しく東風平より來つる事ぞうこそあらめ。とおぼせしかば。總て閑室へ招ぎ入て對面ありよ。松壽は寒温を述もあへず。忙しく小聯をすゝめ。某かく密やかに參る事別儀にあらず。おもふ所あるをもて。衆て南風原の城に開闢行に幾しおき。事の爲体を窺せしに。そのもの甲夜に走り來て。城中に如此々々の密計あり。明日おん諸按司の拜賀に支を托し。八郎按司(爲朝をいふ)と下官を擊とらんとて。もつとも准備すといへり。抑利勇は勁主を挾て。もて按司に號令し。權勢をさ〳〵國王に異ならねども。その智においては懼るゝに足らず。所謂沐猴にして冕するものあり。加旃年來海棠が色に溺れ。專おきを殺して。身の樂みとすゝをもて。上は君真物も祐ぬはず。下は國人も從はぬ。只生おがらその穴を焚んとのみ思ふめり。かゝれば彼が謀によつて。謀を行ひこ。此便宜をもて。速に利勇を誅戮して。民の塗炭を救ひなへ。

と頭をさしよして私語べ爲朝聞て嘆息しいねるゝ所よーといへども王子の仰を受ず
して恣に大臣を殺さゞ叛逆の罪脱れがたけん縱大臣十二分ゝ部ーてこれを害せん
と謀るとも。ゆかずゝ計策を施をゝよしあからん只病ゝ假托てゆかざるゝねゝかざる
べーと思ひの外に回答のへべ。松壽亦いふぞう。つら〳〵和漢の例を推ゝ藤の鎌足入鹿
を誅ー漢の王允董卓を殺ゞ。みな是勅命を稟たるゝあらぞ苟もその謀君ゝ忠あり國ゝ
利あらべ大臣ありといふとも放すべき変かゝ先ぎると知ゝ人を征し後るゝと知ゝ人
ゝ征せらるゝはやく御おゝろを決ーぬへかし。と勸るに爲朝ゝおほ承引ぬゝぞ浩嘆ゝ鶴
亀ゝ事の趣を竊聞ーて屏風の背より走り出按司(爲朝をいふ)この佞人ゝお謀られぬ
ひそ其兄弟御許を受て。まづ松壽が首を刎不忠不義の罪を糺ーて。おかーて後ゝ國賊
等を討滅べー。といひもあへず劍の鞘を握り固めて左右より挾み立あがらべ砍伏せん。
と目上ちかく盞ひかゝるを松壽ゝ驚ざたる氣色もおく見かへりながら冷笑ひ。こゝ小
賢さ太郎金等が不忠嘆ゝり。これゝ元来一点の罪おし。物ゝ狂ふて過すを。といゝせも果
ず同胞齊一膝をふり立わが父ゝ是汝が爲ゝ武藝の師おり且當初父が吹舉ゝよりて里
之子ゝ舉れたるゝ恩を棄て恩を思ゝず義を忘れて勢ひに就き利勇ゝ媚諛ひて忠臣を

殺せり。その罪一ッ亦王女御母子の中城を落ぬゝとき汝願夫人を誑引出ーまゐらせ姑
場の山里にーて情おくも擊奉りし其罪二ッ亦査國吉と共ゝ王女を救ひ進らせざりー
ゝ意中ゝ奸計あれべこ。この故ゝ査國吉ゝ忽地翼を失ひて討死せり。その罪三。この三ッ
の罪あるに誰か不忠不義といゝざらん吾們王女御夫婦の仁慈ゝよつて年采おの城中
ゝあり汝が世ゝ花やぎたる形勢を見聞く毎に齒を切るおと既に久ー。おかれども君父
の仇人利勇をいまだ擊得ざれべ綽社破れんとを思ふて曩ゝ佳奇呂麻にて汝を闚窺お
がらかゐ〳〵ーく手をくだざりー。かくても脫るゝ路あるぞ。といきまゐ知おがら拔か
くる刃ゝ恐れず莞爾うち笑み緣故をあらざれべその部ひゐ理おり。おの件のとゝつき
てゐ。胸くるーきとおきにーもあらぞ。をりを得べ寧王女に告まゐらせんと思へども言
ゐ漏易きをもて。ゐまだ申さず八郎按司も聞召るべー其不肖なりといへども爭ろ願夫
人を害ー奉るべき儀れべはやおゝゝ六年ゝおりぬ夢の迹世ゐ只苦場の山里ゝ利勇が
軍兵充滿て脫るゝかたも懸ゝ王女伐落ーまゐらせんとてみづから刃ゝ伏ゐひー願夫
人のおん首級をゐゐりて利勇が兜を解しそのゝち越来の石橋ゝて討死ーゝる真鶴が
死首をもて寧王女の伐ん首級おりといひおーらへ奸智ゝ長たる利勇を欺く苦心ゐ一

朝に說盡しがゝしかるに王女は存命て佳奇呂麻に在するよし八郎殿(爲朝)に訴へよとて。利勇はふらく松壽を疑ひ忠義めかして王女を迎へ。密にこれを妻殺しさて松壽をも殺さんと心にふかく計較けんそは氣色にて猜したりおはいかにして寧王女を救ひ進らすべうもやとときまかうさま思へども。おもひかねつゝ佳奇呂麻に赴き王女に拜謁し奉れば。物のいひざま面影まで。むかしに似ぬはむかくては利勇が妻計を脫れぬはんと容易しとはゞめて心おちゐしかべやがて南風原の城に冊さ入れ奉るに果して利勇が疑ひ解君臣悉なきことを得たり。亦某年来利勇に媚諛ひ彼が門の狗となりし先師手按司の遺訓にして。查國吉と共に死ざりしは。始終の忠義を思ひ為べおりさはべ查國吉は杵舊が義を守りて討死し松壽は稚嬰が忠を守りて。阿容々々と讐に從ふ彼を恥るものはいと多くこれをあるもの稀なるゆへに國家ふたゝび興らんとを苦し紀もの乱れぬる世にあふ忠臣義士おりといひかけて目を押拭へば今までいさめる鶴亀も刃をおさめて嘆息しいふべきともおかりける折しもあれ王女は屏風をかいやりつゝあゆみ出て爲朝の傍に侍り襟かきあはして松壽に對ひ東風平按司の心操さはありつらんと思ひおがら麓夫人を擊奉りしと年来疑ひはれやらねば今宵鶴亀はさゝやき紀て。その胸中を撈見るに足下の忠義をおもるのみおらずとが身を輙く落さんとて。みづから刃に伏ゐふ母麓夫人の仁悲はかゐもよしなき蹴の涙ふかき歎きに沈みしなり。寔に松壽微りせばとが身はさらおり鶴亀等も嚮雲利勇が手に死おん毛國鼎なり松壽へ查國吉へ真鶴おり忠臣義女はありおがら國賊に世をせばめられ逆臣のみぞ時を得し蝸牛の角の爭ひに中山山南山北と三に分かれしあの國の涙の鼓は何の時うちもおさめんとばかりに袂を頬に押當たまゐべ鶴亀は目と目をあはしいとゞ無念もますら雄が禁めかねてはおか〳〵に涙はあやもおかりける當下王女はおはたゝく瞼をやうやくに拭ひ喃とが丈夫彼處にて聞侍る利勇等が邪謀をおん身の危窮とおりおがらうちも驚きぬはぬはおぼしき旨あるやらんゐゝる大事を婦女子のとあ宇まうをべきはは侍らねど王子は僅に六才社小兒おり縱その命を受たりといふとも名あつて實おれに侍らずや大功は細謹を顧ず大禮は小讓を辭せぞとかいにしへの勇士もいふめり。只御こゝろを決せられ利勇を誅し驟雲をうち滅して國人を救ひゐへかしと宜ふにぞ爲朝は手を叉き默然として在せしが扇を把て膝をつき立いはるゝ所道理に稱へりとれ亦利勇をおそるゝにあらず亂れたる世の人心は笑の中に刃をかくし錦の裏に毒を

む松壽おりともうち解てゐ大事を語ひがたしと思唯して再び三たひ推辭しゝ既ゝそ
の行ひを見亦その言伝聞く毎ゝ忠義おらぬといふとなし今ゐ疑ふべきゝあらぬ義を
見てゆざるゐ勇おゆなり利勇を討とる計策則ゆまほしと宜へば松壽ゐ欣然として席
をそゝめ頭をまゝへ肝膽を吐ゆ計略既ゝとゝゆへば鶴亀ひとしく勇みたち君ゐ逆
臣父母の讐たる利勇阿公等が首を斬くとらん事只この一舉ゝありといふ。これを忘れ
て解高く捺る拳の早歳や燃るがごき壯佼のこゝろさおそと推量り外へや洩れん音〻
ておと王女がとやむる憚の關えあるゆく八臂の鷲ゝ暇まうして陶松壽ゐ忙しげゝ退
出つゝ馬に閃りとうち跨りて東風平の城へ歸てけり却説本日ゝもおりぬ豫てはかり
し事おれば爲朝ゐ衣冠を整へ王子ゝ祝し進らぬるとて大きおる花籃の中ゝ鶴亀同肥
を繰し入きて夥の壯丁ゝ扛擔し二三十人の從者を領て城を出馬の足搔をはやめぬふ
ゝ時刻を定めたりければ陶松壽もおゆ北及ゝ東風平より參りつ途にて是彼ひとゝ
ゝおり兩按司轡を並べて。いよゝ路をいそがし聽て南風原の城へ入りぬへば應鶴呂
禄出むかへて正殿へ誘引に被花籃ゝ車をゆけたり爲朝みづからその綱を拿て徐や
かゝ歩こたまへば松壽もそ社後方ゝ跟て廊を過ると社左右ゝ帷幕を垂れて人ありと

かゆ一きを尻目ゝかけつゝみなもろともゝそゝみ入るゝ正殿の聚簾捲あげさし阿公
ゐ王子を抱きて高坐ゝあり利勇ゐそその次ゝ坐し諸按司ゐ北面して二帶ゝ居おがれた
りそ社と社爲朝ゐ王子を拜せんとして松壽ゐ伯と見かへりぬへば松壽ゐはやくおゝ
事を得て劒を引拔き飛かゝりて前ゝ立たり應鶴を只一打ゝ砍仆せば利勇阿公等大き
ゝ驚きおゐ奇怪おり狼藉おり物ども出よと喚せもあへず鶴亀ゐ身甲おて花籃の中よ
り跳り出刀を閃しゝ利勇を擊んと覺ひ覺れば利勇ゐまを〳〵周章して更に敵を
るゝ反ゆず身を轉して逃んとをるを同肥左右より引挾み遊間もおく擊ほどゝ利勇ゐ
脫るゝに路おくて劍をもつて受とゆめ二三合戰ひしが孝心擬たる同肥が陽の劍を拄
かゐ初大刀ゐ鶴二の大刀ゐ亀が踏こむ鋒さがりゝ左右の髑砍割られ臂居ゝ撞と仆る
るを起しも立ぬ跨かゝり中城の按司毛國鼎が子ども鶴亀先考の寃を雪め國の爲ゝ逆
臣利勇を誅をること喚かけてやがてぞ首をかゆ社落をその隙に爲朝ゐ只一擊ゝ呂禄を
切伏せ血刀引提て立ゆへば松壽ゐ王子を取まおらせんとて阿公に飛かゝれば阿公い
よゝ慌忙社逆賊松壽王子を弑し奉るやと呼ぶ程ゝ松壽ゐ思ゐずたゆたへば阿公得
たりと身を反りて引とめられたる袖ふり放左手ゝ王子を抱きそえて喘々ぞ逃走れば。

為朝の謀
孝子仇を殺す

松壽ハさらおり鶴亀ハ母の仇人脫さじとて喚とめ〳〵追蒐たりされば爲朝松壽を搦捕らんとて帷幕の内ヨ繰ひたる筬登之等ハ暗弓幽齬て出走を失ひ且爲朝の武勇今ヨはじめずその勢猛ヨ辟易してみな悉く降參を況て祿高き按司親雲上いひがひなき北里之子等ヨ至るまで頭を叩き拜伏して吾儕元來野心おゝ王女八郎君のおん爲に忠信を勵むべゝ命を助ゐへおゝとて勸解ヨけまゝ爲朝かゝる徒を殺さゞ汝達固に先非を悔て國ヨ忠義を竭さんとおらゞはやく阿公を追ひとゞめ王子を慫おくとりゐへとて過半その坐をたゝしゝれハ淫婦海棠を捕んとて弓箭を手挾ミ筬登之を將て彼此を索ゐふヨ海棠ハ紅粉樓の欄干に身を倚て苑の花を眺めてをり爲朝みづから筬登之を將て樓上ヨ走り登りゐふを見かへりつゝ冷笑ひ衝と身を起して欄より飛をりんとする處を爲朝弓箭うち刺ひてよつ引彈とゑおちゐゐ寃たがいゞ海棠が細首弗と射切りゐへゞ怪ゝ死かゝ疾口より黑氣隱々と立のぼり煙の中ヨ老たる法師忽然と立あらハれ呵呵とうち笑ふ脣もろともヨ朦朧と形ハ消ておかりけり爲朝ハこの形勢ヨ弓杖衝て倍とまらまゑさてハ海棠ハ暾雲が幻術のおす所彼禍歌ヨ興おらず罪おき夥の人を殺す。狄法なゞ。と宣へゞ衆皆げヨもと思ひあハして坐ゐ舌を掉ひけりさる程ヨ陶松壽ハ走る阿公を追留んとて廣庭ヨ跳り出たまゝ生茂る樹立ヨ隔られて思ふがごとくおらず阿公ハ老たれども。おゐ健やかヨて足いとはやく王子を抱ゐおがら鼬のごく樹間を走り繞るほどヨ松壽ハ忽地ヨその往方を見うしなひこゝろまず〳〵焦燥て樹の枝を推ゞき草葉をかき拂ひつゝ索るヨ遂ヨふたゝびこれを見ぞかゝりし程ヨ鶴亀ハ仇人刹勇を擊とゞつ怨ハおゝ阿公をやハ脫さゞと早雄のをゞ瀬ヨあらてゆく水を堰もかねたるこゝちして同肥ふかく望を失ひ筬牆の外面へ走り出る折しもあれ城灘の中ヨ水音して雅兒を右手にさしあげ潛り出るものありけりこハ阿公おりと見てければ。鶴ハ汀の樹蔭ヨ躲ひ亀ハゆくさきヨ身を伏て俟とハあら髮ふり亂を翼のおくれ毛かゐ死あげて雙手ヨ絞る綾の衣賢い君よ。啼泣ゐふおいざ懷へと抱き入れて濡れたるまゝヨぬくめ鳥迹ハ濁れど委みおく岸の小細竹をちから草身を跳らあて這ひ登りゆかんとそれゞ思ひもかけず服さきちかく見かを亀か刃を跳りおゐ亦ふりあゞる右手の腦丁と突たる手煉の拳法叫苦とゞかりヨ二足三足遂巡ぐ弟を擊せゞとて阿公やらぬと叫かくる鶴の一聲驚かず見かへりおがら打かくる阿公が銃鋭を刃の鞘に受とめても。とまらぬ仇人ハいちはやく水際の芦のいと暗く蘂死が中ヨ飛び入りぬ。

第五十五回

按司を會して爲朝曚雲を討
城壘を捨て賊將首里に走る

爲朝既に海寨を破て接上を下りなへ〻松濤鶴亀に諸按司親雲上等とともに歸り來つ。吾們八方よりかまを掛て阿公を追留んとするに件の惡婆に王子を抱て城の濠門より脫れ去り往方もしらざりてけとまうをまぐ爲朝聞て眉うち顰め阿公に原是貪婪無慈の老婆なり這奴脫さ去たりとも何ほどの事かあらん只忍にまがたたに王子のうへおり。阿公もし敵地に走りて曚雲が賊兵に捕られ王子に不禮の事あらば誰が爲にか義兵を揚べた。これ己が患る所なり諸君ふたゝび部して王子を索まゐらせなへ。とく〳〵といそがしなへ〻衆皆異口同音してまうをやうその事ふかくお愁ひなひそ王子に妃腰へとまうせども實に出處定かおらぬ且按司(爲朝)に先王の駙馬にして寧王女の良人おり。よしや王子在すとも曚雲を討なへんに孰かその義にあらぬとまうさんさきば吾儕に王子の往方しれざるを愁とせず只曚雲が滅ざるを患とをまづ利勇が貪り貯たる財寶を散して窮民を賑し山南をうちおさめて曚雲を滅しなへん事こそ願しくいへ。と言語を盡して諫しかば爲朝ちから及ずして且くその議にしたがひ。みづから城中をうちめぐりて罪おの囚徒を放出し寶藏を開かして積る所の金錢を所司軍民等にわかち與へ亦罪おくて利勇が爲に殺されたるもの〻妻子を賑しなひしかべ。みおその仁信に感激し枯たる稻に雨にあひ轍の鮒の淵に入るこゝちして歡ぶを限りなく此君の爲おらば命も絶てをしからぬとく曚雲を討なへかし城濠の埋草とおるまでも高恩惠に報んと思はざるものおかりなりかゝりし程に爲朝に利勇が苛法を去て賞罰を正くし遂に鶴を大將とし亀を副將として南風原の城を守らしおの〳〵由斷おく王子の往方を索まるべきよしを聞えおきて松濤を東風平へうへらし次の日大里へたちかへりてありし事どもおちもおく王女に物がたりなひしかば王女に綽の趣をつくつくとうち聞て。一たびに利勇が族滅せられしをこゝちよしとし亦一たびに王子の往方おれざるをいと淺ましく思ひたまへり。かくて爲朝に間切毎に聞おらして王子の往方をたゞねまゐらせ亦首里に間諜者をたかわし阿公が所在を聞定めんとしなふに月日のみいたづらに經にけれど王子の往方をおるによしおく。その年も暮れて春も彌生になりしかば南風原東風平より松壽鶴亀等連署して人馬既にとゝのひぬ諸方の按司に牒状あはして曚雲を討なへと勸るに爲朝に時をほにやしとのこ回答してかる〳〵

しく勦さぬれば王女にこの形勢をいひがひおーと思ひぬふまとかくして今茲も亦九月の下旬になりまければ爲朝俄頃に軍議ありと觸しらして大里の城に諸按司を會集ぬへば來風平の按司陶松壽南風原の守將鶴亀小禄の按司儀翰八頭山の土官田平等をはじめてみなこの席に與らざるものなかりけり。そのとき爲朝は扇を笏に把てのたまふやうこれもからぎもこの土へ漂着し國の亂れにあふをもて國王の女壻と呼れ位高く任重く諸按司に尊重せられて安然とーて日をおくる豈本來の面目ならんや曚雲先王を弑逆し王宮をおさへて久しく逆成を振へり只恨らくは大臣利勇國の爲に忠を竭さぎ一時の虎威を逞ーて淫酒に耽り寇を討んといはせずーて罪なき軍民を殺し剩陶按司と爲朝を害せんと謀りしかども己を得ぎと去年利勇を誅ーたり。ーのりといへども王子を阿公に奪ひ去られて平生の望を失ひその所在をしらん爲に各位の催促を黙止して。かるがるしく軍兵を起さぎこは曚雲が幻術を怕るゝにあらず王子を南風原にかへーまゐらせずは爲朝恣に大臣を殺ー王子を追ふて山南省を奪へりと人云ん。この事ひとりこゝろ苦しく敵地に至るまでーのびびに殘る隈なく密まゐらぼるといへども王子の存亡ーるに由なし月日は流るゝ水に似たり時と勢ひは失ひ易し人生七十古來稀なれば爲朝も死ーなば亦死ーぬべし。おのおの曚雲を滅ぼすべき今は是非に及ぎ王子の所在をしらぎといふとも先王の爲に義兵を揚て國社安危を定むべーされば王女はわが妻なれば尚寧王の嫡女なれば今日の主人公と定め翠簾を垂て殺處にありと扇ーて指示ーぬへば。これを聞くものいと理あるとて四巻つゝ坐に感涙拭ひあへず翠簾の中にも王女の聲ーてともならざれば いひがひおーと思ひ侍りたる悔ーさよと宣ふ隨に洩聞ゆまべ爲朝のさねて松壽に對ひ陶按司は智謀ふかく且地理に精細と聞り。あの殿は北の方首里に鄰て兵をもゝむるに便あれども山路險阻にーて進退自由ならざるべし思ふ所あらば聞まほしーと宣へば松壽もゝ出てまうもやうこの處首里に遠からねば敵に防禦の備あるべーかの山路羊腸にーて兵をすゝめがたしもーおゝより直に攻入らんとそるときは驍勇方の士卒を失ひて勞ーて功をおーがたからん愚案をもて謀ぎときは大里に智勇の大將をのこーおき君はみづから諸按司を將て竊に川良の津をおゐ辨嶽北麓より繞り出て急に浦添の城を攻おとー宜野灣美里の地を略ー北より南にうち向ひ長く驅て首里を攻ぬはば曚雲みづから城を出て戰を決すべし。そのとき大里に殘りとゞまりたる身方の大將二三百の遲兵を將て山路に

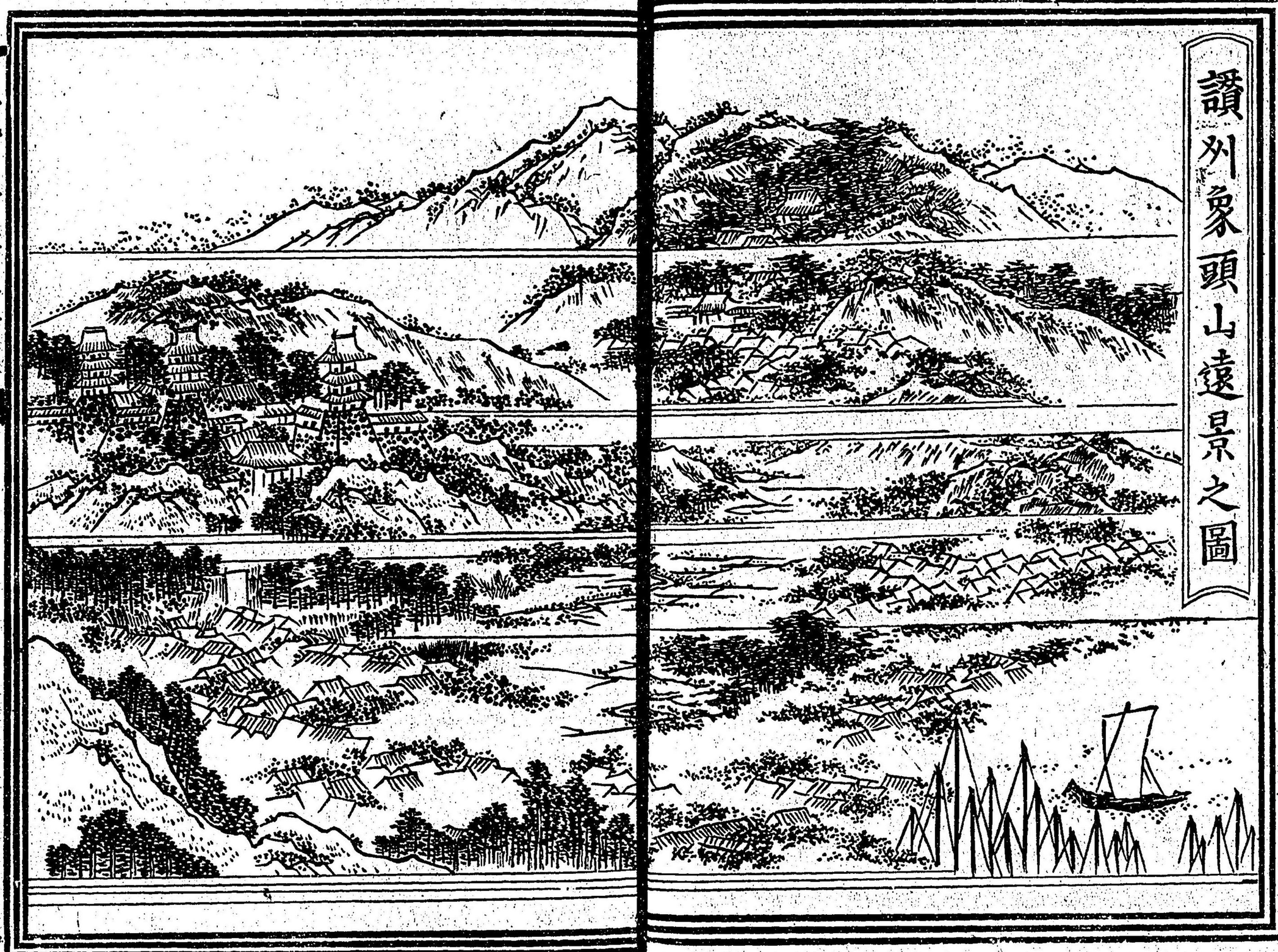
わけ登り火急に敵の背を襲へば暈雲幻術ありといふとも前後に敵を受けて防ぐに所爲おく忽地擒とおるべしとて。辯舌おがるゝごとく述ふければ衆皆ふかく嘆賞しこれ謀を帷幕の内にめぐらして。勝を千里の外に決するの妙策おるべしと稱しかば爲朝やがてこの數にたがひさて誰をかこゝに殘しとゞめて敵の背を襲ずべきと問ぬへば松壽亦さうをやう鶴亀い年おを已かけまどその智勇久毛國鼎が風ありこの同肥に立ますものあるべからずと若まうせば鞆亀聞て歎べず暈雲い君父の仇おりたまく逆賊退治の時にあふて小霎時おりとも後ぎん吏願しからぞと呟けり爲朝見かへりてうち笑ひ進むも退くも忠義の爲おらば誰かあれを聽したりとせんおかはあれど進むを歎び退くを厭ふい勇士のつねなり。已れこの同肥をもて先陣たらおめんと謀しも恐ひ定めたれば別にその人を擇むべし王女いにが前妻白縫が靈によつて智謀勇力をさを男子に恥ず且士卒の尊敬をる所これに過ぎたるものやはあるかゝれば王女をもて搦手の大將軍とし敵の背を襲すべし爲朝が義兵を起をに事缺て女人を大將ませしおんどあざみ笑ふものあらんが往昔上毛君形名が妻はみづから女人數十人を將て東夷を征伐し唐山高凉の洗氏といふ女子い三軍に將として百越を威服せり。もしよく功をおそとあらば婦人おりとも用ふべし各位はいかにおもひたまふと宣へば松壽い諾按司とともにまうすやう王女みづから搦手の大將とおてうち出ぬはゝ君い南に向ひ王女い北に向ひ陰陽和合して勝利掌を指をがとしと回答しかば王女もこれをも是聞ぬひて。ふかく歎び仰遲しと待ふふわどに爲朝ぬたゝび王女に謀略を傳へて搦手の大將と定め亦小禄の按司儀翰八頭山の土官田平はその年既に五十にあまりて頗思慮あるものなれば。これらを殘しとゞめて王女に從はし亦鶴亀を先鋒として松壽を軍師とし爲朝みづから中軍の將として。千三百騎を二手に已分。そのうち三百騎い王女にあたがひて搦手より進むべしとて。軍議日おらず整ひぬ時に大日本安德天皇の壽永元年九月廿八日の曉がたに爲朝い一千の選兵を引卒して大里の城を出一ヶ日佐敷(間切の名おり)に人馬を休めて。おほ馳加る士卒をまちあはし遂に川良をうち越て辯嶽の麓を繞り出短兵急に浦添の城際ちかく攻よせぬふ是より先曙雲い棟孫奇律之全廣等を呼び集合南風原にて利勇が擊れたる姿景を見るがどくに說あらしさていふやうわが謀りしに違ずして利勇い既に殺されて山南の十餘間切悉く敵爲朝に屬せり。おかれども爲朝元來智勇あきべかるくしく此方を攻んとはせじ。その故い利勇が殺されたる日。

阿公王子を抱き去て竟に所在をあらせぎ是一去年五穀登らぎして山南兵糧に乏かりき是二。これ亦仰て天文を見るに爲朝が命運いまだ竭ぎかゝれぱこゝたより彼を攻るも益なし思ふに爲朝。この秋の田租をおさめ果るをまちて首里を攻んと議をるなるべし汝等聚て。このこゝろを得よと說示せしが。九月の下旬に至りて曀雲に亦棟孫全廣等を集合ていふやう疑ふも說諭せしどく既に爲朝が軍議一決して攻よせんとをると。旦夕に反べり彼爲朝に剛勇が備ふあらぎ且陶松壽ゐを翼てふかく謀るものゝこゝをもて王女を搦手の大將とし大里の山路を越て不意にこが背を襲んともおかれども。こがこの千里眼に漏るゝことなけれぱ更に怕るゝ足らぎ棟孫に はやく浦添に進向ひ奇律之に宜野灣を守り全廣に五百騎を將て那覇の港口の浦曲を繞り小禄の砦を攻おとして南風原社城を拔き島袋のかゝに火の發るを見ぱ軍兵を二手に分て東風平大里の城を奪とり直に王女が背を襲に一戰にして擒にすべし亦棟孫奇律之等に爲朝狀拄て且く戰ひ勢ひ竭たるおもゝちして城を捨て亂走し敵をこゝたへ誘引かしこれおのづから謀ありと說示せぱ衆皆欣然として領掌しこが法君かゝる袖沒不測の妙計あり爲朝王女を擒にせんと何の疑ひかいへきと祝して おの〳〵出陣せりさる程に爲朝に鶴亀を先鋒として浦添の城に攻よせぬへぱ城の大將三司官棟孫數百の賊兵を引卒し城をはおるゝと。十餘町にして。これを迎戰へぱ鶴亀真先に馬を出して棟孫と戟をまゝへ左右より刺ゝつまぱ棟孫竟に敵し得ず馬に拍いれ逃走る爲朝に賊軍の亂るゝを見て士卒を進め勢ひ潮の涌がごく去べ死路を遮りぬへぱ棟孫に憑に城中へ入らんとせぎ潔て謀りし事あれぱ首里を授てぞ敗北をかゝりし程に爲朝に輙く浦添の城を落し長く驅て直に宜野灣を攻んとてその夜に具志川に屯して。おぱし人馬の足を休め東雲引渡を比及にまづ斥候を以敵のやうを窺しめぬに宜野灣社賊將奇律之に浦添の落城に膽を冷したりけん夜の中に城をぎて引退きてひと注進を爲朝おれを聞てうち笑ひ烏合の賊軍こが武勇を聞おぢし戰ずして逃走るさもあらんさもありなん今に背に思ふ敵なしこの處より首里までに里數いくぱくかあると問ぬへぱ鶴亀ひとしくすゝみ出こゝより首里へに遠からぎ宜野灣の西南に龜山ありこの處より首里に屬を龜山の麓を末吉と唱ふ末吉の南に西儀保あり朱平村の北をおぺて儀保と喚おせり儀保を越ぎぱ赤平あり赤平に石虎山あり。みおれ龍宮城の北に當れり。はやく石虎山を取りぬにぱ城を攻るに便宜あるべし。と回答しかば爲朝ふかく歡びて。ふたゝび

軍兵を三手ゝゝきゝやがて龜山ゝすゝみ入りゐへゞ松壽諫てまうをやう晩雲ハ漢の張角が流ゝして。その幻術量がたゝ。ゐかるゝ棟孫奇律之等城を捨て走りゝ夏ハふかき謀あるゆえおるべゝ。再三賢慮を廻らさるべうもやゝ諫ゝかゞ爲朝聞てうち点頭ゐをもゐかゐ思ハさるゝあらず凡幻術をもて人の眼目板惑ゝ種々の妖怪を現ぎるとき或ハ獸の鮮血或ハ人の糞汁を沃ぎかくれゞ幻術忽地破るゝものゐり瑣てこの夏を思ふが故ゝ獸血人糞をゞて汚穢ものを夥の桶ゝ貯て陣中に齎ゝ来れり。先鋒の兵等ハおのゐ社長き柄杓を准備ゝも。ゝ曚賊がゐやしゐ術を行ふと見るゐらば速ゝ沃ぎかけて擊破るべゝと仰それゞ鶴龜同肥ゝの謀を受て秋の水の決ごとく龜山をうち踰つゝ末吉ゝ攻かゝれゞ棟孫奇律之一手ゝをりてこゝを破られにと防ぎ戰ひゝがゐおぼゝて引退くを鶴龜等奮擊ゐて。おれを追ふと甚急なり。その勢ひ破竹のごくおりゝかゞ賊の兩將儀保ゝも馬を駐め得ず赤平さへゝうち捨て龍宮おへ逃入りけり。

弓張月拾遺附言

金思羅名號之記



讃州象頭山遠景之圖

鎮西八郎為朝外傳椿説弓張月拾遺巻之五　東都　曲亭主人編次

第五十六回

島嶽を塞ぎて曝雲為朝を焼
餘煙を拂て王女良人を索

為朝の武威中山を動し迯るを追ふてすゝむ程に輙く石虎山を取て要害とし。亦龍宮城を攻んとてうち出たまふに斥候はせかへり。曝雲みづから數百騎を將て金城まで出たりと報知しかば為朝聞もあへず大九に歡び松壽を見かへりて宣ふやう。これ頃日地圖を開るに敵金城に龍宮城の西南にありて大里を背にす。これ今その前より攻撃王女後よりこれを襲はゞ一舉して曝雲を擒とせんと疑ひおし速に寄よとて只管馬をむやめたまへば松壽亦諫てまうすやう。曝雲はよく人の胸中を察し千里の外をみるの術あり大將は且くこの所に御陣をめされまづ鶴亀等にお意を擊して。その剛膽を試みゐへかし。とまうすに為朝頭をうち掉て鶴亀は年已かくして。曝雲が敵手に足らず為朝みづからおもを擊すは豫て此計略合期せゞ軍師の異見恩應に過たり。これおのづから所分あり。と回答もあへず鞭を揚馬の足搔を急しゐへば士卒の勇氣日来にまして早

雄の壯佼等みな後れじと相從ふ。抑金城は方數十町の曠原にて馬のかゝ引便よく東に崎山あり北に長川ありその地山南に相離りて大里へ遠からぬこの邊はこれ代々の國王出遊の地方にて左に金城橋あり右に翠巖亭あり爲朝既に曚雲が陣頭ちかく馬を駐て前面を偵と見なへば群立たる賊軍四五百騎忽地二隊に相別かれ推出す四輪車に黄羅傘蓋挿かけて飛に吹ふをらし左に棟孫あり右に奇律之あり車ゑうちには賊將曚雲頭に薩星巾を纏ひて身に蛇皮の法衣を着下し肩に竹布の袈裟を掛手には羽扇を拿たりけるそのとき兩軍鼓を鳴らし鬨の聲をあはせれば爲朝も亦鶴龜を左右に從へて馬ゑ跳らし馳出なゝ大將その日の出立には花曇子の真紅に染おしたる鎧直垂に紫糸の鎧金物重く打たるを透間もおく着下し白星の五枚兜の吹返しに日光月光の二天子を金と銀とに彫出して打たるを猪頭に著おし保元の合戰に嚴父爲義朝臣が新院より給はつたる鵺の丸といふ金作の圓鞘の名劔に三尺六寸の大刀を佩添たらうをべの尾の矢三十六指たるを箭高に負ひおし重藤の弓の握太なる真中記て黄毛毛の馬の太く逞しきに蒔龍膳を金具に磨とる鞍を置て厚懸の鞦燃たつばかりおるをかけて白縅の下に立なゝそのの形勢あたりを拂つてこの國人は目に馴ぬ武者態成あつて猛からず天晴大將軍やとばかりに身方も敵もおしなへて感嘆せざるはおかりけり。當下爲朝は鎧踏張り鞍壺に突立あがりて曚雲を偵と睨へ拘黨の惡僧いかあれば妖術を逞しく尚寧王を弑逆して久しく王宮を踏あらを孰のその暴惡と憎ざちん武名は荒磯をうつ浪の音にも聞かば目にも見よ大日本清和の嫡流八郎爲朝といわが事かりはからぬ王女の緣に繋れ去年逆臣利勇を誅しこの秋更に義兵を起して汝を討て三省の民の塗炭を救ふものなり。もし露ばかりもその非を悔ひ天罰脫れがたきをえらば面縛して刀を受よと聲高やかに罵りなへば曚雲呵々とうち笑ひ汝は是東方の浮浪人身のおき所おきまゝにこの國へ漂着し王女と密通して國王の壻と稱し勢ひに乘して大臣を殺し王子を逐ふて山南を押領もその惡心虎狼に勝まり。これ些の兵を遣して生拘采さんと思ひしが万機に暇あければ年來放しおきたるに。みづから來つはる夏虫社。火虫が燈によるに似たり誰かある這奴擊とれと下知すれば。うけなはると回答つゝ曚雲が左右おりける棟孫奇律之二騎相並んで辨々と馬をよせれば爲朝怒て些とも礙々せず。みづから戰んとあなゝを鶴龜推隔て衝と馳出迎をゝみて戟をあはし人まぜもせを戰へば賊の兩將ちから衰へ馬を飛して引かへず寄手は敵の大勢おらぬを見侮りて

ありける1今鶴亀か一陣1刺萌そを見ていよ〳〵勇み勝誇たる辭おれ〻只直推に追ふ程1曙雲騒ぐ氣色もおく空中を指招けゞ一朶の烏雲まひ降り雲の中1一軍の異形の人馬立顯ま進む寄手をかけ隔て縦横無碍1戰へ〻松壽下知して齋ーたる汚穢ものを柄おがき鞭1汲うけさしてはら〳〵と沃ぎかくれ〻曙雲が魔軍紛々と地上1墮るをつら〳〵見れば或ハ青紙を剪て兵の形とおーあるひハ藁を束ねて馬とせり。されゞこそ曙賊が妖の皮を剝得たゞとく生拘れと大將は烈き下知1諸軍兵籠拔たたき鬨を揚透間もおく競ひかかる折ーもあれ曙雲が後陣のかたより亂れ騒げ〻妖術施そ1由おくてゞ曙雲ゑ車をかへーて慌忙き脱んとゞ爲朝これを齎ーて賊の後陣より亂るゝハ搦手の軍兵出来りてその背より襲ふおるべーはゞく東北のかたを指塞ぎ。城へお入れそと来配うち揮身方1先だち曙雲が車1眼をかけ追擊たまへ〻賊軍いよいよ途を失ひ籠宮城へハ得も入らゞ長川をさーて逃走ま〻遂し返せと喚とめて大將みづから追蒐たまふを松壽ハこゝろもとおくて曙雲かならゞ詭の計あるべきに且くとゞまりゐひねと脅をかざり1叫べども爲朝さら1耳1もかけゞ中山南山の境おる茂林のかとり1到たまふ1忽地曙雲を見うーなひ士卒れの〳〵こゝろまどひて左か右かと躊躇折から天俄頃1結陰日ハ高けれど野千玉の闇より闇1入るどく大將ハ士卒をあらず士卒ハ大將を見ゞ風さへいとも烈ーき1山鳴動きて樹を仆ー砂を飛ーて面をうつ。おれだ1おゞしも堪が〻死に前後左右に賊兵起つて爲朝を逃をお。と異口同音1呼びかけて射る箭ハ雨よりおほ繁し今まで勇る身方の軍兵膽を冷さずといふものおく或ハ亂箭に射倒さま。あるひハ株1跌き倒れ。おのが刃1刺傷られ死をるものいくゞくとゆふをあらゞ松壽鶴亀等も賊軍1かけ隔られけん爲朝ハたゞ一騎1おりたまひ1けれど實よき鎧を着ゐへゞ。たつ箭一條もうらをかゝず馬さへ幸ひ1恙おりーかは其首ともあらゞ數十町辛〻て走りたまふ1火光幽1見えたり些し活たるこゝちーて彼火を目標1とかくーて走り着て見ゐふ1人家1ハあらずして。いとも稍高き森の中1燈籠を掛たるおり暖國おれゞうら枯せぬ草葉長く生茂れり古廟かと見れゞ廟ゑおし。こハ何處なるらんとて僅1てらゞ燈火1て彼此を見かへりたまへば樹下に牓示ありて。島袋の二字を寫ー。その下1朱をもて細書ー爲朝こゝ1到て死すべー。と書たれゞ讀も終らず大き1驚き。お。の所ハ山南に屬ーて大里へ遠からねど高き山1包れて東一方おらて出べき門おーさるによつて島袋とハ名づけたり。これ闇死1惑ひ

て思ひもおよらず走り入りたれば敵もー出口を切塞んといかにーてか脱れ去るべき。危いかなとひとり言して轡を引かへし馳出んとーぬふに曙雲繚てたかりけん忽地夥の柴をもて出べき門を塞げとおれば爲朝まを〳〵こゝろ驚き馬より閃りと飛び下りたゝ山のごとくに積あげたる柴掻退んとしぬふに怪しいかな件の燈籠おのづから撲地と落その火八方に散り亂れて秋の螢の飛ぶごく樹の枝草葉いへばさらなり。はや彼積たる柴にもうつりて煽々と燃あがるに山風ふたゝび吹荒れて猛火四面に散亂す。馬ねこれに駭き狂ひて馳めぐり馳かへり尾髢を燒れ煙に堅び戦かへりて斃けり爲朝ね水陸の軍に熟て万夫無當の勇将おれども火を脱るゝ術おくて。たゞしが程ね弓をもてうち拂ひぬへども。その身金石にあらざれば上差の征箭鏃の威毛直垂の袖までも。悉く燒斷離られ烈火の中に立ぬふ。その形勢ね正に是駿河の收に田獵せー日本武尊に似たり。されど吹かへる風もあらで。今ねかうとおぼせしかば鵜の丸の劒引抜つゝ腰帶剪て鏜投すて天を仰ぎて嘆息し時おるかあるゝお保元は亂れより死をべき命をいくたびか脱れてこゝに漂着ー今妖賊が幻術に火攻せられてあへおくも武名を他の國に墮をあら朽をしと叫びぬふ齊のみ煙の中に聞えて今を限りと見えたりけりさる程ね女王ね大里の山路より曙雲が背を襲んとて。まづ間諜者をもて合戦のやうを聞したまふに。そのもの走りかへり来て八郎按司の大軍戰ふ毎に勝に乘らぎといふをおく浦添宜野灣の兩城を攻おとし既に赤平まて殺入りぬひぬと告にければ。さらばゆそげとて。百騎を殘りとゞめて大里の城を守らー儀翰田平以下。二百騎を將て潛やかに山路二里ばかり進みぬふに忽地日の光暗くおる隨に島袋のかたにあたりて猛火天に衝て燃あがれば王女ふかく怪こて。あれねいかにとばかりに馬を駐めて見かへりぬふ浩處に大里の城を守る軍兵等半身血に塗れて走り来つ息も吻あへぎまうすやうさても曙雲が大將耳目官全廣が四五百の軍兵天よりや降けん地よりや涌けん王女は城を出ぬふを窺ひ知て直々と推寄せ嘯叫て攻たつるに城中以の外に無勢おれば命を限りに防ぎ戦へども力彼に敵ーがたく城兵悉く討死せり吾濟ね縡の趣をまうさんとて走り来つる道すがら人のいふを聞に小禄の砦南風原東風平の城おんども敵に奪ねれたりとまうーきと半聞かけ田平儀翰等あね〳〵かに。と呆れ果士卒迭に面をあはー進退究て見えたる折から曙雲が大將棟孫捷路よりーたりけん數百の軍兵忽然と前面の峯上に立あらはれ汝等おらをや爲朝ね長川のほとりにて一千の士卒殘りあく擊

とらを竟に嶋嶽に惑ひ入りて猛火のうちに身をおけば灰燼とおりてうせぬべし命おしくば寧王女を搦出して降參せよと呼わる聲は谷に響き研に苔て夥しく真逆おとし馳よせれば王女は馬を馳あゆ小ざかしきかお鼠の輩身はこの國の寧王女武名は良人とともに舞く白縫姫と志らざるや女子とて侮らば目に物見せんと拿たる薙刀水車の如くうち繞し近づく敵をかけ惱しばらりぜんと砍伏せなへば案内あつたる賊兵等是首の樹の蔭枝首の巖角に立ならべかれ射る箭は蝟の飛ぶごとく志れをら防ぎかねたるに後方よりも賊將全廣大里の城を攻おとし王女を追留め擒にせんとて夥の軍兵を引卒し哨と嚔てはせ來れば身方まほ〳〵辟易して更に戰ふこゝろおく懸に活路を索かねては射ておとされ死するもおその數をあらず中に儀翰田平は王女を落しまゐらせん爲に二騎相ならべて進まぜ退かぜ儀翰は棟孫が箭面に立向ひ田平は全廣を遮り留めて且く挑戰ふといへども身方悉落うせて外に援の兵おけれは二人もろともに射すくめられて亂軍の中に討死せり。そは隙に王女は一方の圍を砍ひらきて走りぬふに。おほ擊留んと追蒐る敵近よれば引かへして薙刀をもて切ちらひ退けば亦馬をたゞめ二里の山路を黄昏るゝまで賊兵等におくられつゝとても死をべき命おりとも良人の先途を見定めて。とこゝろ一をぢ二條の流矢に馬を射さして歩行立になりぬひつは嶋嶽を投て走りたまふにその日も既に暮果て敵もやうやく遠くおりぬ子四のおろかと思ふ程に辛ゝて走り着き是處かとばかり見なへば草木と〳〵く灰燼とおりて巖石のみところ〳〵にあらはれたるがおほ燃殘る株おどは煙の中に横り目もあてられぬ分野は被胡蘆谷にそゝぐ雨おく亦被田畢が火牛喘ぐに似たり。うちがなしくもに丈夫の亡骸やをはもるゝと薙刀をもて灰木を搔わきつゝ索たまへば。こゝに爲朝の乘たまひぬる馬とおぼしくて鬣尾毛燒かたまりて。いと淺ましくも斃れたり。おの馬既にかくのごとし主もいかでこの存命なはんん鐘の金具のみ殘りて。おん白骨の見えたまはぬは敵の爲にとられたる歟。よしや最期に後るゝとも。おなじ煙と身をおしてに誠心をあらし侍らん。定に君は日の本社王孫名家の御曹司と生れなへど果報微く故國にその身を容れられを海に浮みて亦この邦の亂れしを討おさめんとて稍逆臣を誅戮し仁義の軍を起しなへは神も憐と見そおはし。冥助應報あるべきに世ねさかさまの桑の弓折れてかひおく妖賊が計策に乘られて猛火の中に燒れなふ武運の末は是非もおし。おもひ出れば七年の月日もおゝ無限月小琉球の島北にて。とらはを救ひなひしに。それは

良人を救ひ得ず。蜩野の雉子つまおひて音をのこぞおくかひおやと齊を限りてかきぼ
既く男子まさりの賢妻勇婦もおゝろ亂れて涌かへる涙の石滴掬あへぬ黄泉へか
へらんとて半焼殘る巨木の枝を引あつめつゝ烈火の中へ飛入らんとしたまへば死た
る馬の腹の中より。やよまちなへと呼とめ。這出ぬふれ爲朝ゝ王女思ひのけさまば且
怪み且歎びこれ悉おくてをれせは歟。と忙おく走りより問べき事もおか〳〵しふたゝ
び袖をぬらしたまへば爲朝も亦王女の只ひとり來ぬふを怪てまづその故を問ぬへ
ば王女れ大里山のあなたにて前後の敵に攻たてられ儀翰田平等をもじめとして士卒
多く討死し大里以下の城れ全廣に奪れたりといふ首尾を告ぬへば爲朝頻に嘆息し。
これも亦滕雲が幻術にはからきて松壽鶴亀が生死存亡ども未らぬ白日俄頃に黒夜と
ありて。おもれぬおの島袋に惑ひ入り遂に火攻せらきて。脫るべうもあらざれば今れか
うと思ひ定めて刃を腹に推當しが。佶と思ひかへすことありて。死たる馬の腹を截割そ
の血を吸ふて咽喉を潤し馬の腸を飀出して。その腹中に躲れしかば辛じて猛火に燒れ
ず火れ出のづから鎭りしが敵にあられじとおもふからおほ今までも出ざりき。未かる
にたん身も又賊軍を殺脫て夫婦もろともに九死を出一生にあひぬるおと天地神明の
祐あるに似たり凡功業をたてんとおもふものれ火をも踏水にも入るべし只堪がた
きを堪忍びて時の到るをまつにれあかず漢の高祖社七十餘戰も九里山の一戰に勝て。
四百餘州を得たり。これ今松壽鶴亀等を失ひて左右の翼おしといへども彼等も又存命
てゞにあるおらば。ひとつに聚る日もあるべし。といへへ城やぶれ士卒擊きて。この身を
寓るかたもおし夫婦が命を天にまかして。脫るゝおどれ脫きて試んふたゝび賊兵出來
らば悔ともそのかひあるべからぬ。とく出たまへ。といそがしたまへば王女れ火急の時
に臨みて必死を脫れぬひぬる良人の頓智を感嘆し夫婦忙しく島袋を走り出て通宵走
りぬふにゆくともあらぬ詰旦具志頭のあなたなる松山の磯に來にけり。未かれどもこ
の荒磯れむかひへ渡る小島もおくいと太やかなる蘆荻の生繁りて漁る蜑の笘屋もあ
らず既に餓疲きて今れ一歩も運びがたければ。おれいかにせんとて夫婦巖に尻をかけ。
忙然として坐そる折から具志頭のかたに物の音して落人を搦捕れといふ聲聞ちかく
聞えて多少れあらぬ賊の軍兵一群だちてぞ出來たる爲朝夫婦猛しといへどもいたく
疲れたまへば禦ぐにもべおし前れ海おり後に敵あり定に脫れかたへおる蘆の中に潛
の音さして舟漕よそるとおぼしきが忽地訛さる聲たかく

濱千鳥迹は都へかよへども身は松山に音をのみぞ鳴く。

それは日本の讃岐潟。あれは琉球具志頭の荒磯もおおゝ名ゝしおふ君まつ山の浦ゝ来て。都へかよふ船賃さんとゝ〳〵召れはへ。とくりかへしつゝ語ひけり。畢竟こゝに船を寄たるその人をあらんとならば。拾遺下篇のえゝめゝ解おこそを。讀得て知るべし。

椿說弓張月拾遺編附言

曲亭馬琴演

余嘗この書の因ゑ崇德院の官社奉祀の顚末白峯明神の由來並金毘羅權現靈驗利益等將治承文治の年間より天文永祿の後ゑ至るまで。おゑを祈て厄難を脫れ或ゐ如意の福を獲て官祿を子孫ゑ傳へたる緣由亦おの神の祟ゑよりて身を滅し家を亡ひ或ゐ不慮の禍ゑ係りて恥辱を後世ゑ遺たる緣故種々樣々の物語を輯錄して。おの書の後ゑ篇列をべくおもひたるに思ふゑおして卷の數もかさおりゑければ只速ゑ本書の局を結ん爲ゑ。おれらの事ゐ他日の著述ゑとて得も演盡さずおりぬ。おかゑども每篇その事を書つゐれきてしかべ。おゝゑ聊管見を演て其槩略を擧余いまだ四國の土を踏を或ゐ古記に本づ紀或ゐ傳聞ゑよるが故ゑ遺漏も多く且訛謬も多かるべし。

金毘羅名號 幷 安井金毘羅之事

曲毋子祭を拂ひ硯を淨め更ゑ記して云讃岐國鵜足郡ゑ靈山あり象頭山と号山の勢おのづから象の頭に似たり祭神一座これを金毘羅大權現と稱ふ按ずるゑ和漢三才圖會ゑ云金毘羅權現ゐ鵜足郡にあり祭神いまだ詳おらず或ゐいふ三輪大明神又ゐい

ゝ素盞烏尊ゝ云云。この說頗悞れり夫金毘羅ゝ異域の善神佛法守護の明王ゝ今象頭山の別當を金光院と号を社家雜れり開基の年月詳ならぬ世俗崇德院天皇を配祀といふ。おれらの辨ゝ下ゝいゝん讃州覺城院南月堂三等の金毘羅名號考ゝ云增一阿含經第四曰(經文今婦幼の爲に國守に諱を下皆こゝゝ欲へ)提婆達兜者闍崛ゝ到て大石十肘(十肘ゝ二丈四尺あり)廣五肘あると世尊ゝ擲んとす山神金毘羅彼山ゝ住せり。提婆達兜が石を抱て佛を打を見て即時ゝ手を伸て餘處ゝ接せり。○亦天台妙文句八之二曰佛阿耨達泉に在て舍利弗に告て曰我者闍崛に於經行せしゝ提婆達多高崖に於石の長三丈濶丈六ゝるを擧て以て我頭を抑とゝつ者闍崛ゝ山神を鞞羅と名つく手を以て石を接を云云。(鞞羅ゝ即金毘羅)亦法苑珠林七十三に興起行經を引り引ところの文上のゝ○亦寶積經金毘羅天授記品曰尒時世尊王舍城ゝ入りたまひ四衆ゝ圍繞せらゝて容儀庠序たり時ゝ王舍城を護る諸天藥叉大善神王あり金毘羅と名く如是の念を作を今如來の形想殊異ゝして世間の中ゝ於最勝遇難し人天の供養を受るに堪へん我等今當應種々の上妙供具を以如來に奉獻をゝしとこの念を作し已て便最勝の飲食具足の香味成就の妙色を以佛ゝ奉上に尒時世尊其獻を受る所を愍の故ゝ納受ゝたまふ時ゝ金毘羅王の領ゝる所の藥叉衆六万八千虛空の中ゝ在て隨喜を生を云云○亦不空三藏所譯の金毘羅天童子經曰佛歡喜園中ゝ在て諸衆生の爲說法ゝゝへり是時外道波旬諸惡障を起して諸衆生をして大苦惱を受しむ尒時如來密ゝ自身を化して金毘羅童子と作て外道諸魔を調伏し惡世の中ゝ於衆生を饒益しゝへり已上見つゝ諸經文ゝ載るところ金毘羅ゝ佛法守護の大善神或ゝ釋尊分身の自在明王たり既ゝ六万八千の藥叉衆あり藥叉天拘亦等類地藏經ゝ所見あり寺島が和漢三才圖會ゝ衆頭山の天狗を金毘羅坊と名く靈驗多し祟る所も亦甚嚴ありといへり此ゝ天狗と唱るものゝ所謂金毘羅王所領の大藥叉ゝゝるべし。○亦金毘羅翻名本地の辨ゝ云大寶積經ゝ金毘羅天といへり又金毘羅神王亦金毘羅世羅といへり大般若經ゝゝ迦毘羅神と說藥師經ゝゝ俱迦羅神と說大日經ゝ俱鞞羅と說り皆梵語の轉聲ゝ天台妙文句ゝ鞞羅といふ蓋舊譯の略ゝらん金毘羅ゝ此ゝ翻して威如王といふ言ゝこの神の威勢通力譬ゝ世間の王者其邦内ゝ於能自在を得たるが如し故ゝ以これゝ名たく其本迹を論ゝるゝ大寶積經ゝ由と記ゝ本地釋迦如來ゝゝると明けし。又增一阿含經及興起行經等ゝ由ときゝ本地不動明王ゝりといゝんも亦宜也然れども其實を約

する時に同一法身なる故に釋迦に即不動不動に即釋迦にして不二即離不離又舊觀に曰本地に顯密の二佛あり八幡宮天滿宮社類あり。おほ深旨ありといへり此に由ておれを觀れば衆頭山に祭る所三輪明神素盞雄尊にあらざるべし唯世俗崇德院を以金毘羅とす。その事絶て考る所なしといへども天皇に讃州志度にて崩御あらせぬふに。その比あの君の神靈の祟らせぬふにて世間騷擾かりしかば追號をまゐらし洛のほとりにさへ御靈を鎮め祀りぬひまけまべ衆頭山の金毘羅に配祀れりといへんも故なきにあらぬ例せば武藏國神田社明神へ平將門の靈を配祀れるが如し今見に洛東觀勝寺に祀りたてまつる崇德院の御廟を世俗安井の金毘羅と唱ふ又東都谷中のあまた日暮里なる青雲寺の山に禿祠あり寺僧に問へば安井の金毘羅をうぢし祀るといふ蓋安井に地の名あり洛東祇園林の坤所謂觀勝寺のほとりを往昔に安井と唱たりかゝれば青雲寺新堀山に祀るところも觀勝寺に等しく祈らば必應驗あるべしなかるに件の宮社に尋常の禿倉にして扁額あかりしかばおゝに遊觀するものも等閑に見過すもの多かりしに。ある人祈願あるが爲に社頭に石を立て神号を表せり。○山州名迹志卷之二愛宕郡 東山觀勝寺の條下に云當地を斥て安井と稱を是當寺の号にあらぬ古の主によるの舊稱あり堂を光堂と号し院を光明院と号ぬ當寺の草創に平安城遷都已前にして春日明神垂跡の靈地たりおゝをもて大職冠藤原足公この地景を愛し自紫色の藤を植て藤氏の繁榮を祈りぬへり。その苗殘て毎春に貴賤に目を喜べし遂に花社寺と唱ふ今おほその名を存せり崇德天皇この花を愛しぬひてをべ〳〵行幸あらせぬひしかば。あるとき白衣の童子忽然と出現して帝に咫尺したてまつりこの藤の由來を奏そらく往古藤原不比等南京に南圓堂を建立ちつるとき春日明神老翁に化現して普陀洛の南の岸に堂立て今ぞ榮ん北の藤浪と詠じぬひしにこの藤あり南京よりこの處北に當れり所謂藤氏の先祖鎌足公の植ぬへるによりてかゝる神詠ありしと奏せり帝感淚からず殊に信敬しぬひて。やがてこの所に殿舍を造營し寵妃阿波内侍を住しめてたえを渡御ありけるその後保元の兵亂に及て新院に讃州松山へ遷され阿波内侍にひとり都に留られて哀慕の涙乾く間おし新院もいと不便に思食龍顔を鏡にうつして手ぢから束帶の尊影と御隨身二人を画きこれを内侍に送りぬへり今おの三幅の画像當寺にあり亀山院のおん時に及びて崇德院の御靈おの處に臨幸ありて夜々光を發ぬひしかば京師の良賤これを見て。おゝ怪ぶとゆふものあし光堂の号にこれよ

り起れり。この比大圓法師といふ真言修煉社行者あり。夜靈光を見て。その處に參籠し懇切に持念ありしかば一夕崇德院玉體を現じ給ひて。この處の來緣を示し給ひしかば大圓をおいちこれを朝廷に奏聞す文永年間勅諚ありてその地に佛閣寺院を御建立あり光明院と号して尊靈を鎮まつり法施不退の靈場とおし給へり。ゝくて文永五年戊辰秋九月大圓上人住職して觀勝寺と号せりされば歷代の天子御造營あり。或云元享釋書及墨寶抄に載るところの觀勝寺は當寺にあらず東山の中に同名別寺ありて共に大圓住持の寺ありといへり。○又云崇德院宮は佛殿の南東面にあり願崇德天皇（豎願筆者不詳）天皇の震影（衣冠坐像二尺有餘）堯海作あり傳に云後鳥羽院の元暦元年四月三日建立。當寺にれおゝ震影の畫圖あり衣冠坐像右に向ひ給へり御長二尺四五寸許并に御隨身の像あり衣冠老懸尻籠を以け弓を持左向か四位の袍右向か五位立像あり共に三尺許。已上山州名跡志に載る所要を摘ておれを錄す所謂世俗の安井の金毘羅と稱するものゝおもならん歟。再び古記を按ずるに名跡志の說と合ざるもの多かり便左に援引して。もて証とに。

保元物語卷五に云治承元年六月二十九日追號有て崇德院と申す。（參考に岡崎本に六月を七月に作るを是とす云云）加樣に宿進らせられども。おを御憤散ぜざりけるにや。同三年十一月十四日に清盛朝家を恨奉り太上天皇（後白河帝）を鳥羽の離宮に押籠奉り大政太臣（師長）以下四十三人官職を止閑白（基房）を太宰權師に遷し進らを是直事にあらず崇德院の御祟とぞ申シける。その後人の夢に讃岐院を輿に乘奉り爲義判官子共（參考に云半井本に云爲義父子六人）相具して先陣仕り。平馬助忠正（半井本に云忠正父子五人家弘父子四人云云）後陣にて法住寺殿へ渡御あるに西の門より入奉らんとするに爲義申シけるは門々をば不動明王大威德の固給ひて入り難しと申せば。さらば清盛が許へ入進らせよと仰けまべ西八條へおしさてまつるに左右なく内へ御幸ありぬとぞ見たりける。誠に幾程なく清盛物狂しく成たまふ是讃岐院の御靈とて宿進らせん爲に昔御合戰ありし大炊御門が末の御所の跡に社を造りて崇德院といひ奉り（參考に崇德院の遷宮吉記百練抄を引て元暦元年四月十五日とも）并に左大臣（頼長）贈官贈位行はる少納言經基（參考に因に經基當に惟基に作るべし）勅使にて彼御墓所に向て太政大臣正一位の位記を讀懸けり亡魂も左こそ嬉しと思召けめとぞ人申しあへり。○又源平盛衰記卷之四十一に云元暦元年四

月十五日子時に崇徳院遷宮あり春日が未北河原の東おり此所に大炊殿の跡先年の戰場なり去りし正月の比より□部卿成範卿式部權少輔範季兩人奉行として造營せられけるが成範卿に故少納言入道信西が子息に信西保元の軍の時御方にて專事を行はれ新院を傾け奉たるものの息男に造營の奉行神慮えゞかり有とて成範を改られて權□納言兼雅卿奉行せられけり法皇御震筆の告文あり參議式部大輔俊綱卿ぞ草しける權□納言兼雅卿紀伊守範光勅使をつとむ御廟の御正體に御鏡を用らるけり彼御鏡に先日御遺物を兵衛佐局に御尋ありけるに取出て奉たりける八角の大鏡おり元より金銅の普賢像を鑄付奉たりけり今度平文の箱に納奉られたり又故宇治左大臣の廟同く東の方にあり權□納言拜殿に著て再拜畢て告文を披れて又再拜あり俗別當神祇大副卜部兼友朝臣(吉記に朝臣を宿禰に作る)に下ゐに兼友祝ひ申して前庭にしてこれを燒けり玄長を以別當とも故教長卿の子慶緣を以權別當とす故西行法師の子に遷宮の有樣事において嚴重おりき。○亦參考保元物語に吉記を引て云(原漢文今國字をもつてこれを抄せ)壽永三年四月の條に云朔日式部權少輔範季朝臣來談して云崇德院御拾社每事いまだ定らぎ御正體何物を用らるべ紀歟の由議するとあり先兵衛佐局に尋られ申して云年來御持佛の普賢像并御鏡當時現在も又以來御枕(馬琴按ずるに以來御枕に木の御枕を以の悞おらんか)佛像を造奉らる先左府に仰合さるゝの所如意輪普賢の二體(御枕之外)を安せらるべし右府申されて云二體の體謂おし如意輪を安せらるべし今一體云云(この下四五字文をおさぎ得て讀べからず)又云十五日今日崇德院宇治左大臣靈神を崇ん爲社を建遷宮あり春日河原を以其所とす保元の合戰の時彼御所の跡あり當時上西門院の御領今申シ請れて。これを建らる津々に材木を点じて宮を造營す云云○保元物語參考に云按ずるに本書の文路崇德院の遷宮と頼長の贈官と一時之叉たるに似たり吉記百煉抄等の文に據ときに。即崇德院遷宮の時頼長も亦并祀のみ贈官に即崇德院の奉謚とれおゞく。是別に一時なり。

右抄ぼる所の古記錄に由ときに崇德院の尊像畫幅等に文永の比に造設られたる歟名跡志に記る所誤あるべし。

○東鑑卷之四元暦二年四月の條に云廿九日壬午云々今日備中國妹尾郷を以崇德院の法華堂に附られ是沒官領として式部(頼朝)拜領せしめゐ所おり彼御菩提を

資奉らん爲ゝ衆僧社供料ゝ宛らる　○同書卷之五文治元年乙巳九月の條にいゝく。四日甲申の云云崇德院の御靈殊ゝ崇奉らるべ紀よし社事等京都ゝ申さる。是朝家の寶祚ゝ添奉べ紀の旨二品(朝頼)の御存念甚深之故也これらの文ゝ由ときゝ當時朝家ゝさらあり武家に於て亦崇德院御靈を崇信し奉るゝ淺からぎ往昔稱德天皇ゝ廢帝の祟をおそれゐひ桓武天皇又井上廢后早良親王の祟を怕れゐひて追号祭祀叮嚀あり紀或ゝ醍醐院の菅家の靈を怕れゐへたる或ゝ頼朝卿の安德天皇の靈を怕れ奉りたる北條義時が後鳥羽院の靈を怕れ奉りたる尊氏卿が後醍醐院の靈を怕れ奉りたる皆年紀同して論ぎべし夫亂政の世ゝ鬼神顯る寃魂下ゝ蔭をるときゝ祟あらぎといふことあし匹夫匹婦もそのこゝろざしを奪ふべからず況て人君寃を含て邊境に遷さる。これ人道の大愛あり。こゝゝおいて鬼神顯れ遂に大ゝ祟あり人えゞめてこれを曉る亦遲からずや曾子の曰これを慎めや。これを慎めや汝ゝ出て汝ゝ返るものありとゝ抑古れをいふ歟。されべ屈原汨羅ゝ投て楚國ゝ不祥多く菅家宰府に薨ゝて雷雨宮闕ゝ迫れり善人忠臣不幸ゝして世の苛政ゝあへるすら天これを痛ゝ深し後人おほ思ゝぎ寃を人主ゝ致せり悲しいかゐ。

○和漢三才圖會卷之七十九讃岐國の條ゝ云白峯明神ゝ阿野郡ゝあり。(高松ゝ至て三里)祭神崇德院(人皇七十五代ノ天子)鳥羽院第一之皇子諱顯仁母ゝ藤原璋子待賢門院と号す五歳ゝして即位永治元年廢せらる。(在位十八年)保元元年讃岐國ゝ遷流せられ長寛二年八月廿六日薨國ゝおいて崩御白峯ゝ葬奉る。(壽四十六歳)又云崇德天皇社ゝ白峯ゝあり(南向)本尊十一面觀世音立像二尺三寸。(此ゝ國分寺に至り一里半阿野川又加茂川等あり)又云白峯寺ゝ阿野郡青海村ゝあり。(山ノ上坤向)本尊千手觀音(立像三尺二寸)百餘丈の嶽あり兒嶽と号く云々已上　○友人修靜菴嘗記して云白峯寺の緣起に云山陵の在とおろゝ是其寺の西北嵎といへり。その寺の西北嵎今これを捻まるゝ孤墳ゝ岩壁の上ゝ據れり封土高八尺石牆以おれに環るその前ゝ廟あり帝の遺像を安して。もて祀奉る又左に母后の廟あり(待賢門院藤原氏)右ゝ山神の廟あり。(馬琴按ずるゝ土人爲殺爲朝の墓とはるゝ此おらん歟)國守世よく堂宇の備造を加ゐへり。(この他の陵ゝ阿波國又薩摩の封内ゝあり並ゝそ社國君亦よくこれを敬したまへり。)嗚乎亦異哉僻陬ゝ寢陵あり其生るときゝこの土ゝ幽辱せられゐゝ死しゝゝゝ長く靈威を見ゝ祭れべ即福を授これを他ゝ比するときゝ荒穢ゝ就ゐゝ

も幸といふべし。といへり。○三州名跡志に云崇徳院の陵は讃岐國兒嶽にあり前に爲義爲朝社墓あり五輪の石塔を立云々前の説と異あり并考ふべし。○白峯の山中に杜鵑の玉章といふ元社あり是杜鵑社致をとおろそのの形玉章に似たりよりて名づく。寄他州に有さるものあり。○保元物語にこの君怨念によつて生おがら天狗の姿にあらせぬひける云々と記したれば彼叡頭山の天狗を金毘羅坊に号するといふ説に附會して。やがて金毘羅は崇徳院の靈神にをはしますといふにやおほ慥なる本据ある歟尋ぬべし今地圖を按ずるに松山は多度郡に屬し白峯は阿野郡に屬し叡頭山は鵜足郡に屬して各相去ること遠からず就中白峯と叡頭山とは相並て中に一條の大河を隔たり叡頭山へは大かた丸亀より登山を(行程三里)夫この山の首尾たるや高松丸亀の封疆に接せり。おかるに高松に屬をる處は樹木森然として山色青く丸亀に屬をるところは兀山にして草木おしそのの故をおらぎといへどもこれも亦奇といふべし。かゝまべ崇徳院の靈神彼山に徜徉おぬふといはんも以おきにあらずおかまども金毘羅は前に演るごく異域の神なり或はこれを金山彦神と稱す。これ神書佛經を見ざるものゝ妄説にして。金毘羅の金の字と金山彦の金字とおおいさをもて牽強附會の説をおもも社歟延喜式神名帳又國史を按ずるに金山彦の神社は美濃國にあり三代實録巻之二貞觀元年正月廿七日甲申京畿七道の諸神に階を進め及新に叙を總二百六十七社云々美濃國仲山金山彦神に正三位を授云々こ邑おりおかるといへども叡頭山に社家あるがゆえに。別に垂跡の神まーまは歟おほ尋ぬべし。○金毘羅靈驗記に云讃州叡頭山金光院は何れの年何れの師の開基といふことをおるものなし古老の云往昔役行者この山に攀登りて持念ーぬふとき岩崛大に鳴動して崛中に膚あり行者に告て社たまはく我は舊天竺者闍崛山に住して釋尊社御法を守護し奉りきかくて如来滅度の後われおの山に来り住と既に久しおかれどもいまだおるものおーあこの山を開きて佛法を弘めばこれ必守護すべしと宣へば行者ふかく敬信し崛に近つきて再拜おぬふとき光明赫爍として神體眼前におがまれこまひにけり。かくて數百年の後亦聖僧あり叡頭山に登りて只願持念祈請して云むかし役行者修法のとき出現ーぬひしと聞傳る尊容をおがまーたまへとて七日斷食して丹誠を凝を程に七日滿をる曉方に神體忽然と出現し。汝が丹誠を抽ずるが爲に示現を專苦行して天下の萬民を利樂をべしと告ぬふとなんされば近世この神の靈驗殊更に著明にして祈れば必應報あると響の物に應ぜる

がどー宜おるかお。都鄙參詣の長賤千里を遠ーとせど或ハ神體を摸ー或ハ神号神符を受て街頭門戸ニ祀もの多かりそのの神德利益のたときハ靈驗記と名づけたる印本既ニ二本ありて世ニ行るゝがゆゑニ今こゝニ贅せず。

金毘羅神法樂眞言

ろかかにかたぞぞ　ぞ而礼

例祭又多かりそが中ニ。三月八日より十一日に至て花立會といふとあり○六月八日より十一日ニ至てこれを十七夜と唱ふ同時に觀音の大市あり○十月八日より十一日ニ至て大會といふことあり祭禮ハ十月十日あり。○凡參詣の人鋼鐵を禁ず又禁忌の物あり。蟹(五十日忌)川魚及蒲(三十五日忌)海藻(三十日忌)又鰯を忌おほ神傳神秘あるべし是その概略おり。あおかしこ。